

## 第8章 旭川市民におけるアイヌの人々との 交流およびアイヌ文化との関わり

小野寺理佳

名寄市立大学保健福祉学部教授

### はじめに

本章では、旭川市民に焦点を当て、市民とアイヌの人々との交流、および、市民とアイヌ文化との関わりを取り上げる。まず、第1節では市民とアイヌの人々との交流、第2節では市民とアイヌ文化との関わりについて、それぞれアンケートデータ表8-1にもとづいて全体像を量的に把握する。第3節では、それらの全体像をふまえ、インタビューデータ表8-2に拠り、生活の様々な場面における交流のありようや、アイヌ文化にふれたり体験したりした具体的エピソードを考察する。最後に、知見を整理し、旭川市民におけるアイヌの人々との交流、および、アイヌ文化との関わりについて、その特徴を明らかにする。その際、これまで各地域で実施してきた先行アイヌ調査、とくに、都市部調査として2014年に実施された札幌市調査の結果や知見を適宜参照する<sup>1)</sup>。なお、分析に際し、交流の頻度や内容が年代によって大きく異なることが予想されるため、市民を、青年層（20～30代）、壮年層（40～50代）、老年層（60代以上）の3世代に分けて検討する。

表8-1 アンケート対象者 世代別・性別

単位：%、人

	男性	女性	合計
青年層	28 (38.9)	44 (61.1)	72 (100.0)
壮年層	67 (40.1)	100 (59.9)	167 (100.0)
老年層	106 (44.2)	134 (55.8)	240 (100.0)
合計	201 (42.0)	278 (58.0)	479 (100.0)

\*自由記述等をもとに、対象者本人がアイヌあるいは和人配偶者であると推察されるケースの有無を確認したが見当たらなかった。

\*先行研究においては、世代の区切りを、20～30代、40～50代、60代以上としており、本稿においても同様に設定している。有効票492中、「青年層」「壮年層」「老年層」の合計は480である（未成年者を除く）。表8-1では、世代と性別のクロス集計をしているが、老年層のうち1名の性別が不明であるため、欠損値として除外され、合計が479となっている。

表8-2 インタビュー対象者 世代別・性別

単位：人

	男性	女性	合計
青年層	0	1	1
壮年層	5	6	11
老年層	4	3	7
合計	9	10	19

\* インタビュー対象者の年代・性別構成には偏りがあるため、発言数を世代別、性別に比較することはしていない。

### 第1節 旭川市民とアイヌの人々との交流の全体像

本節では、アンケートデータにもとづき、市民とアイヌの人々との交流の全体をとらえる。はじめに、交流頻度を見る。表8-3によれば、3世代の合計480のうち、交流が「よくある」1

(0.2%)、「たまにある」14 (3.0%) である。したがって、「交流有」(「よくある」と「たまにある」の合計)は15 (3.2%) となり、交流は著しく低調といわざるをえない。この「交流有」の数値を世代別に見ると、青年層0.0%、壮年層3.7%、老年層3.8%であり、青年層がゼロで他二世代はゼロではないという違いはあるものの、三世代ともきわめて低率であり、そこに世代毎の特徴を見出すことは難しい。この交流頻度の低さ、および、世代による交流頻度の違いが明確でないことは、札幌市調査の結果と同様である。

次に交流内容を確認する。「交流有」と回答した者にその内容を問うた結果（複数回答）をまとめたものが表8-4である。そもそも交流人口が非常に少ないため、数値の大小を比較して交流内容の傾向を導き出すことには限界があるものの、表8-4からは、交流の内容が多岐にわたり、近隣や家庭というプライベートな領域というよりは社会生活のなかでより広く展開されているらしいことがみてとれる。「その他」の内容については、自由記述を得ることができなかったため推測するしかないが、その際、札幌市調査における同設問の「その他」自由記述欄が参考になるだろう。すなわち、そこには「アイヌ関係の文化教室、催し物、展示会、イベント、アイヌ資料館、飲食店の客、檀家、仕事関係」といった記載があり、継続的な交流の習慣というより、一時的あるいは偶然の出会い・付き合いとして認識され得るもののが列挙されていた。したがって、旭川市民においても「その他」が同じような意味で選択されていると考えるならば、壮年層では、そうした類の関わりが老年層に比してより多く経験される傾向にあることができるだろう。

旭川市民とアイヌの人々との交流頻度および交流内容は上記のとおりである。確認されたように、交流人口がごくわずかであることから、交流を規定すると考えられる諸要因（たとえば、ジェンダー、職業、学歴など）を、クロス集計によって得られた数値から判断することには困難がある。したがって、交流の内実への接近はインタビューデータに拠ることとし、それについて第3節で取り上げる。その前に、次節では、市民とアイヌ文化との関わりの全体的状況を確認する。交流が低調であること、すなわち、パーソナルな関係が希薄であることの背景として、旭川市民におけるアイヌ文化の知識や体験、アイヌ文化への関心はいかのような状況にあるのだろうか。

表8-3 アイヌの人々との交流頻度 世代別 単位：%、人

	よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	回答者数
青年層	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (5.8)	65 (94.2)	69
壮年層	0 (0.0)	6 (3.7)	9 (5.6)	147 (90.7)	162
老年層	1 (0.4)	8 (3.4)	24 (10.3)	200 (85.8)	233
合計	1 (0.2)	14 (3.0)	37 (8.0)	412 (88.8)	464

\*不明・無回答を除く。全表において同じ。

表8-4 アイヌの人々との交流内容（複数回答） 世代別 単位：%、人

	近所 付き合い	職場 付き合い	趣味の 付き合い	子どもを 介した 付き合い	インターネッ トを介した 付き合い	学生時代 からの 付き合い	その他	回答者数
交流 有	青年層	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0
	壮年層	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (50.0)	6
	老年層	2 (22.2)	3 (33.3)	3 (33.3)	1 (11.1)	0 (0.0)	2 (22.2)	9
	合計	3 (20.0)	4 (26.7)	4 (26.7)	2 (13.3)	1 (6.7)	3 (20.0)	15

## 第2節 旭川市民とアイヌ文化との関わりの全体像

### 第1項 アイヌ文化の知識・体験・将来の体験希望

本節では、アンケートデータにもとづき、市民とアイヌ文化との関わりの全体的な状況を把握する。アイヌ文化の知識、アイヌ文化の体験、アイヌ文化の将来の体験希望の順に確認しよう。

1つ目に、アイヌ文化の知識の有無を確認すると（表8－5）、およそ半数（51.2%）がアイヌ文化の知識があると回答している。この数値は、札幌市の59.0%よりやや低い水準である。彼らがアイヌ文化の知識をもっていると回答した分野のうち、もっとも多いのが「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」31.0%で、「歌と踊り・楽器」22.3%、「アイヌ語」15.4%と続く。これらはいずれも、鑑賞したり学んだりすることが趣味や娯楽ともなる生活文化であり、イベントやメディアを通して日常生活のなかで知る機会も相対的に多い。それに対して「カムイノミ」をはじめ、伝統的な儀式や祭事に関する知識をもつ者が相対的に少ないのは、宗教的行事という敷居の高さや、これらについて知る機会の相対的な少なさに原因があると思われる。ここで、アイヌ文化の知識有無を世代別にみると、知識をもつ者の比率は世代が若いほど高くなっている（青年層57.7%、壮年層50.3%、老年層49.8%）。これは、施設や展示、各種情報メディア、学校教育といったフォーマルなアイヌ文化の情報源が、量的にも質的にも、だんだんと豊かになってきたという時代の流れと合致している。世代差がとくに顕著なのは「アイヌ語」で、青年層43.1%であるのに対し、壮年層はその半数以下の15.0%、老年層はさらに半数の7.5%という結果であった。逆に、「カムイノミ」「伝統的な葬儀・先祖供養」「イナウを捧げる」「神聖な場所への祈り」「海・川・山でのタブーや約束事」といった宗教的行事については、世代間に圧倒的な較差はみられないものの、老年層において「知識有」と回答する者がより多い。このように、世代によって、アイヌ文化の知識の中身に違いがあることが明らかになった。

2つ目に、同じく表8－5からアイヌ文化の体験についてみると、「体験有」は12.7%であり、「知識有」51.2%のおよそ4分の1にとどまる（札幌市では20.1%）。このことは、第2項で取り上げるが、「知識有」と回答した人々において、その知識が実際の体験や交流からではなく、情報や学習教材から獲得されている場合が多いことが関わっていると思われる。知識を得ても、知識が有ることと実践することの間には一定の隔たりが存在すると考えられるからである。たとえば、青年層において「知識有」の数値が高かった「アイヌ語」43.1%の「体験有」は4.2%にとどまっており、知識と体験が結びついたものではないことがわかる。体験した文化の項目をみると、「歌と踊り・楽器」8.1%が最多で、次が「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」3.8%、その他は1%に満たないことから、アイヌ文化の体験も、知識の場合と同じように、宗教的行事ではなく、生活文化の分野に集中しているといえる。この結果は札幌調査と同じであった。世代による違いに注目すると、若い世代ほど体験があると回答する者が多く、その世代差は、知識よりも体験においてより大きいこと（青年層23.2%、壮年層13.3%、老年層8.8%）が注目される。

3つ目に、市民がこの先アイヌ文化とどのように関わっていこうと考えているのかをみる。表8－6によれば、将来体験したいアイヌ文化があるとの回答、つまり「希望有」は26.8%である。上位を占めるのは、「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」10.6%、「伝統的な料理」5.6%、「アイヌ語」4.8%、「歌と踊り・楽器」4.0%である。工芸や歌・踊りへの関心が高いことは、これらに関する知識や体験をもつ者が相対的に多いことからも矛盾なく説明できるだろう。世代による

数値のはらつきは小さい。札幌市民と比較すると、体験を希望する項目は両市とも同じであるが、「希望有」の数字は札幌市民においては40.2%であり、旭川市民の体験への意欲の方が低調であった。

表8-5 アイヌ文化の知識・体験 世代別 単位:%、人

	知識あり	カムイノミ	伝統的婚礼・地鎮祭・新築祝い	伝統的な葬儀・先祖供養	イナウを捧げる	神聖な場所への祈り	海・川・山でのタブーや約束事	まじない・トゥス	
知識	青年層	57.7	11.1	2.8	0.0	1.4	1.4	0.0	1.4
	壮年層	50.3	11.4	1.8	0.0	1.2	3.0	0.6	0.0
	老年層	49.8	13.3	1.2	1.7	3.7	5.0	0.8	0.0
	合計	51.2	12.3	1.7	0.8	2.5	3.8	0.6	0.2
体験	知識あり	カムイノミ	伝統的婚礼・地鎮祭・新築祝い	伝統的な葬儀・先祖供養	イナウを捧げる	神聖な場所への祈り	海・川・山でのタブーや約束事	まじない・トゥス	
	青年層	23.2	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	壮年層	13.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	老年層	8.8	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	合計	12.7	0.4	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0

	夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど口承文芸	歌と踊り・楽器	工芸(編み物・刺繡・織物・木彫)	伝統的狩猟・漁法	伝統的な料理	その他	回答者数
知識	青年層	0.0	43.1	6.9	19.4	31.9	5.6	0.0	72
	壮年層	0.0	15.0	7.2	21.0	28.1	4.2	0.6	167
	老年層	0.0	7.5	8.7	24.1	32.8	4.6	0.4	241
	合計	0.0	15.4	7.9	22.3	31.0	4.6	0.4	480
体験	夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど口承文芸	歌と踊り・楽器	工芸(編み物・刺繡・織物・木彫)	伝統的狩猟・漁法	伝統的な料理	その他	回答者数
	青年層	0.0	4.2	0.0	16.7	9.7	0.0	1.4	72
	壮年層	0.0	0.0	0.6	9.0	3.0	0.0	0.6	167
	老年層	0.0	0.4	0.0	5.0	2.5	0.4	0.0	241
	合計	0.0	0.8	0.2	8.1	3.8	0.2	0.4	480

表8-6 アイヌ文化の将来の体験希望 世代別 単位:%、人

	希望あり	カムイノミ	伝統的婚礼・地鎮祭・新築祝い	伝統的な葬儀・先祖供養	イナウを捧げる	神聖な場所への祈り	海・川・山でのタブーや約束事	まじない・トゥス	
体験	青年層	25.4	4.2	0.0	1.4	0.0	1.4	2.8	2.8
	壮年層	25.3	3.0	0.6	1.2	0.6	1.2	3.0	1.8
	老年層	28.4	1.2	0.8	0.8	0.4	1.7	1.7	0.0
	合計	26.8	2.3	0.6	1.0	0.4	1.5	2.3	1.0
希望	夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど口承文芸	歌と踊り・楽器	工芸(編み物・刺繡・織物・木彫)	伝統的狩猟・漁法	伝統的な料理	その他	回答者数
	青年層	1.4	2.8	1.4	2.8	11.1	4.2	4.2	72
	壮年層	1.2	5.4	0.0	3.0	12.6	2.4	7.2	167
	老年層	0.0	5.0	3.7	5.0	9.1	2.5	5.0	241
	合計	0.6	4.8	2.1	4.0	10.6	2.7	5.6	480

## 第2項 アイヌ文化の情報源

では、アイヌ文化に関する知識と体験のアンバランスという状況は何に因るのだろうか。表8-7は、アイヌ文化の知識があると回答した者に対して、その知識を得たきっかけや手段を聞いた結果を整理したものである。それによれば、情報源としてあげられた上位3つは「施設・展示物」27.5%、「情報メディア」26.3%、「学校の授業や行事」11.5%である。「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」がこの順番で上位3つを占める点は札幌市と同じである。ここから、「家族や親戚」「近所の人」「友人」といったインフォーマルなつながりを介してアイヌ文化の知識を得た者は相対的に少なく、知識や情報を提供する専門機関・教育機関や、アイヌ文化に触れる各種イベントや展覧会などのフォーマルな経路によってアイヌ文化を知るに至った者が相対的に多いということができる<sup>2)</sup>。このことは、アイヌの人々との交流はきわめて低調ながら、約半数がアイヌ文化の知識をもっているという実態と矛盾しない。旭川市内のアイヌ関連施設や行事について、訪問や参加の経験を聞いた結果と照らし合わせてみると（表8-8）、旭川市博物館の利用経験が突出して多くなっている。

これを世代別にみると、「施設・展示物」と「情報メディア」に比較して「学校の授業や行事」における世代差が大きい点が注目される。青年層34.7%、壮年層13.2%、老年層3.3%であり、若い世代ほど学校教育のなかでアイヌ文化についての知識を得ている。このことは表8-9にも明らかである。表8-9を見ると、学校でアイヌの歴史を学習した経験をもつ者は、青年層71.4%、壮年層33.8%、老年層16.7%である。また、学校でアイヌの文化体験をした者は、青年層21.7%、壮年層8.0%、老年層4.7%である。若い世代ほど学校教育から受けとるものが多いことはこれまでの諸調査でも指摘されてきたところであるが、旭川市民についてもその点が確認された。

表8-7 アイヌ文化の情報源（複数回答） 世代別 単位：%、人

	家族や親戚	近所の人	友人	学校の授業や行事	アイヌ文化を普及している団体	情報メディア	施設や展示物	その他	回答者数
青年層	6.9	0.0	1.4	34.7	2.8	26.4	26.4	4.2	72
壮年層	3.6	1.2	1.8	13.2	4.2	22.2	24.6	6.6	167
老年層	3.3	0.8	3.3	3.3	4.1	29.0	29.9	6.2	241
合計	4.0	0.8	2.5	11.5	4.0	26.3	27.5	6.0	480

表8-8 旭川市の施設訪問や行事参加（複数回答） 世代別 単位：%、人

	旭川市博物館	川村カ子トアイヌ記念館	アイヌ文化ふれあいまつり	アイヌ文化の森伝承のコタン	旭川市立北門中学校郷土資料室	旭川市民生活館	カムイの杜公園	回答者数
青年層	33.3	15.3	1.4	5.6	4.2	1.4	41.7	72
壮年層	46.1	27.5	0.0	4.2	4.8	6.6	36.5	167
老年層	50.2	44.0	2.1	9.5	4.1	9.5	15.8	241
合計	46.3	34.0	1.3	7.1	4.4	7.3	26.9	480

表8-9 学校でのアイヌの歴史学習とアイヌ文化体験 世代別 単位：%、人

	歴史学習した	回答数	文化体験した	回答数
青年層	71.4	70	21.7	69
壮年層	33.8	160	8.0	162
老年層	16.7	222	4.7	232
合計	31.2	452	8.4	463

### 第3項 アイヌ文化との関わりを規定する要因

ところで、アイヌ文化の知識の有無、アイヌ文化の体験の有無、アイヌ文化の将来の体験希望の有無、アイヌ文化の情報源の4つを規定する要因として、これまで先行研究が指摘してきた主なものは、世代、職業、学歴、交流、性別である。体験希望有無に関しては、この他に、アイヌ文化の知識・体験や、出身地（北海道内か道外か）による違いもあることが指摘されてきた。世代別の考察は上で行っているため、ここでは、世代を除く上記の諸条件に関してみていく。また、アイヌ文化の知識や体験の有無、体験希望の有無は、アイヌ文化についての認識によっても左右されると予想されることから、本稿では、「アイヌ文化は現在も残っているか」「アイヌ文化を積極的に保存していくべきか」という2つの問い合わせへの回答結果との関連もみていくことにしたい。

まず、表8-10によれば、アイヌ文化の知識については、ホワイトカラー系統の職業に就く者、学歴がより高い者、交流がより多い者において「知識有」と回答される傾向が高い。これは札幌市調査と共通する結果である。さらに、「アイヌ文化は現在も残っている」と回答する者、「アイヌ文化を積極的に保存すべき」と回答する者において、アイヌ文化の知識をもつ者が多いこと、男性よりも女性において、「知識有」の数値が若干高いことがわかる。アイヌ文化の体験と体験希望についても同様のことがいえる。体験希望については、加えて、アイヌ文化の知識や体験をもつ者、北海道以外の出身者において「希望有」との回答者が明らかに多いという結果である。道外出身者の数値の高さには学歴水準の相対的な高さが影響していると考えられる。最終学歴が大学（大学院含む）である者が、道内出身者の18.5%に対して道外出身者は43.2%となっており、各段に高い。

表8-10 アイヌ文化の知識と体験の有無と体験希望の規定要因

単位：%、人

	知識有	回答者数	体験有	回答者数	希望有	回答者数
ホワイトカラー職	61.1	90	20.2	89	33.3	84
ブルーカラー職	43.3	97	16.7	96	22.6	93
義務教育（旧制高等小学校含む）	30.0	50	6.5	46	18.8	48
高校（旧制中学校、旧制高等女学校、師範学校含む）	51.0	245	8.5	235	25.2	230
専修学校（専門学校）専門課程	52.6	38	18.4	38	18.9	37
短大・高専（旧制高校含む）	56.4	39	16.2	37	36.1	36
大学（大学院を含む）	61.5	96	23.2	95	35.1	94
その他	100.0	2	0.0	2	0.0	1
交流有	78.6	14	64.3	14	71.4	14
交流無	50.2	442	11.2	428	25.8	423
男性	48.0	196	11.4	193	24.2	194
女性	54.2	275	13.8	261	29.1	254
アイヌ文化は残っている	69.9	133	18.4	125	35.0	120
アイヌ文化は残っていない・わからない	43.4	325	10.7	317	24.1	316
アイヌ文化を保存すべき	54.4	408	13.8	392	30.4	385
アイヌ文化を保存すべきとは思わない	27.1	48	4.2	48	4.1	49
アイヌ文化の知識有					36.1	216
アイヌ文化の知識無					16.0	225
アイヌ文化の体験有					54.0	50
アイヌ文化の体験無					22.1	389
北海道出身					25.9	417
北海道外出身					43.3	30

- \*「交流有」：「よくある」「たまにある」の合計。
  - 「交流無」：「あまりない」「ほとんどない」の合計。
  - \*「ホワイトカラー職」：「事務的」「専門・技術的」「管理的」の合計。
  - 「ブルーカラー職」：ホワイトカラー以外の職（保安的、販売的、技能工・生産工程、運輸・通信的、農林水産的、サービス的）の合計。
  - ただし「その他」を除外して集計した。
  - \*「アイヌ文化は残っている」：「かなり残っている」「ある程度残っている」の合計。
  - 「アイヌ文化は残っていない・わからない」：「あまり残っていない」「全然残っていない」「わからない」の合計。
  - \*「アイヌ文化を保存すべき」：「そう思う」「ある程度そう思う」の合計。
  - 「アイヌ文化を保存すべきとは思わない」：「あまりそう思わない」「そう思わない」の合計。
- 以下、全表において同じ。ただし、ホワイトカラー職をw、ブルーカラー職をb、「アイヌ文化は残っていない・わからない」を「非・残っている」「非残」、「アイヌ文化を保存すべきとは思わない」を「非・保存すべき」「非保」と表記している箇所もある。

では、市民が、生活文化や宗教的行事など多彩な内容をもつアイヌ文化に触れる時、彼らはアイヌ文化のどの「分野」を選好するのだろうか。彼らの選好性の方向を規定する要因を確認するために、アイヌ文化の各分野に関する知識、体験、体験希望の有無と、表8-10で掲げた諸要因（の一部）との相関をまとめたものが表8-11、12である。表中の数値は「知識有」「体験有」「体験希望有」と回答された比率である。これをみると、ホワイトカラー系統の職業に就く者、学歴がより高い者、交流がより多い者、「アイヌ文化は現在も残っている」と考える者、「アイヌ文化を積極的に保存すべき」と考える者においては、特定の分野について「知識有」の数値が突出して高いというのではなく、多くの分野について平均的に知識を有する傾向がより高いことがわかる。体験や体験希望についても、知識ほどではないが同様のことがいえる。

ここで、市民がアイヌ文化の知識をもっていると回答した上位3つの分野「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」「歌と踊り・楽器」「アイヌ語」に限定して数値を比較してみると、「知識有」に関しては学歴による差がとりわけ大きく、学校教育の力を認めることができるだろう。それとは対照的に、「体験有」と「希望有」に関しては、学歴の高低よりも交流経験の有無との結びつきの方が強いといえそうである。

また、性別が選好にもたらす影響には興味深い特徴が見受けられる。すなわち、男性においては、「カムイノミ」をはじめ、「イナウを捧げる」「伝統的狩猟・漁法」など、宗教的行事や伝統的に男性主導の領域とされてきたものについて知識をもつ者がより多く、一方、女性は、「アイヌ語」「ユカラなどの口承文芸」「歌と踊り・楽器」「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」のような、宗教的行事というよりは、日頃の趣味・教養・娯楽として親しめる生活文化についての知識をもつ者が多い傾向が認められた。この男女の選好の特徴は、これまで体験したことのあるアイヌ文化（表8-11）や今後体験を希望するアイヌ文化（表8-12）に関しても見出すことができる。知識の有無に関して指摘されるほどわかりやすいかたちではないが、少なくとも「歌と踊り・楽器」「工芸（編み物・刺繡・織物・木彫）」の2つについては、女性の「体験有」「体験希望有」の数値が男性を上回っている。性別による違いは、札幌市調査においても確認されている。

次に、情報源についてみると（表8-13）、ホワイトカラー系統の職業に就く者、学歴のより高い者において、「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」から情報を得る傾向がより顕著であり、この結果も札幌市調査と共通する。ホワイトカラー職の教育水準が一般に高めであると考えるなら、学歴のより高い者ほど学校教育や各種専門機関やメディアに親和的であり、必要に応じてそれらにアクセスし活用することに慣れており、長けているためと考えられ

る。これと好対照なのが「交流有」と回答している者である。彼らの「友人」「学校の授業や行事」「アイヌ文化を普及している団体」「施設や展示物」の数値は、「交流無」と回答している者に比べてより高く、フォーマルな経路とパーソナルなつながりの両方から情報を得ていることがわかる。たとえば、交流関係にあるアイヌの人々のつてや紹介で、アイヌ関係の講座や展示会に出かけるということが考えられる。なお、パーソナルなつながりは、男性よりも女性においてより機能しているという特徴がみられた。

以上、1節では、アンケートデータにもとづいて、旭川市民とアイヌの人々との交流の全体像を描き、第2節では、同じくアンケートデータに拠って、市民とアイヌ文化との関わりの状況を量的に把握した。次節では、これらの全体像をふまえ、インタビューデータから、交流や文化との関わりに関する語りを掬い取っていく。市民はどのような交流経験をもち、それをどのように受けとめてきたのだろうか、また、市民はどのようにアイヌ文化と出会い、そこから何を得たり、何を感じたりしてきたのだろうか。

表8-11 アイヌ文化の知識・体験分野の規定要因

単位：%、人

		カムイノミ	伝統的婚礼・地鎮祭・新築祝い	伝統的な葬儀・先祖供養	イナウを捧げる	神聖な場所への祈り	海・川・山でのタブーや約束事	まじない・トゥス
知 識	ホワイトカラー職	16.5	1.1	0.0	3.3	5.5	1.1	0.0
	ブルーカラー職	9.8	1.0	2.0	2.9	2.9	0.0	0.0
	義務教育	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	大学（大学院含む）	17.2	1.0	1.0	3.0	3.0	0.0	1.0
	交流有	18.8	18.8	6.3	6.3	6.3	0.0	0.0
	交流無	12.1	1.1	0.6	2.4	3.7	0.6	0.2
	男性	15.5	1.9	0.5	3.9	4.4	1.0	0.0
	女性	10.1	1.7	1.0	1.4	3.1	0.3	0.3
	残っている	16.5	2.9	1.4	2.9	5.8	0.7	0.0
	非・残っている	10.9	1.5	0.6	2.3	2.6	0.6	0.3
体 験	保存すべき	13.8	2.1	0.9	2.3	4.2	0.7	0.2
	非・保存すべき	1.9	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0
	カムイノミ	伝統的婚礼・地鎮祭・新築祝い	伝統的な葬儀・先祖供養	イナウを捧げる	神聖な場所への祈り	海・川・山でのタブーや約束事	まじない・トゥス	
	ホワイトカラー職	0.0		0.0				
	ブルーカラー職	1.0		0.0				
	義務教育	0.0		0.0				
	大学（大学院含む）	0.0		1.0				
	交流有	6.3		0.0				
	交流無	0.2		0.0				
	男性	1.0		0.5				
	女性	0.0		0.0				
	残っている	0.0		0.0				
	非・残っている	0.6		0.0				
	保存すべき	0.5		0.0				
	非・保存すべき	0.0		0.0				

		夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど 口承文芸	歌と踊り・ 楽器	工芸（編み物・刺繡・ 織物・木彫）	伝統的 狩獵・漁法	伝統的な 料理	その他	回答者数
知識	w		23.1	9.9	31.9	31.9	1.1	3.3	0.0	91
	b		19.6	4.9	14.7	25.5	5.9	2.9	0.0	102
	義務		5.3	10.5	8.8	15.8	1.8	1.8	1.8	57
	大学		28.3	9.1	26.3	35.4	6.1	3.0	0.0	99
	交有		18.8	18.8	18.8	31.3	6.3	0.0	0.0	16
	交無		15.6	7.4	22.1	30.3	4.5	2.8	0.2	462
	男性		15.5	5.3	19.4	26.7	6.8	2.4	0.0	206
	女性		16.4	9.8	24.0	33.8	2.8	2.8	0.7	287
	残る		23.0	9.4	33.8	37.4	5.8	3.6	0.0	139
	非残		12.9	7.3	17.3	27.0	4.1	2.3	0.3	341
	保存		16.7	8.5	23.9	32.4	5.2	2.8	0.2	426
	非保		9.6	3.8	7.7	13.5	0.0	1.9	0.0	52
体験		夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど 口承文芸	歌と踊り・ 楽器	工芸（編み物・刺繡・ 織物・木彫）	伝統的 狩獵・漁法	伝統的な 料理	その他	回答者数
	w		1.1	0.0	16.5	5.5	0.0	2.2	0.0	91
	b		1.0	0.0	9.8	4.9	1.0	0.0	0.0	102
	義務		0.0	0.0	3.5	0.0	1.8	0.0	1.8	57
	大学		3.0	0.0	19.2	6.1	0.0	2.0	0.0	99
	交有		6.3	0.0	25.0	18.8	6.3	0.0	0.0	16
	交無		0.6	0.2	7.6	3.7	0.0	0.4	0.2	462
	男性		0.5	0.0	7.8	2.9	0.5	1.0	0.5	206
	女性		1.0	0.3	8.0	4.9	0.0	0.0	0.0	287
	残る		0.7	0.0	11.5	5.8	0.7	0.0	0.7	139
	非残		0.9	0.3	6.7	3.5	0.0	0.6	0.0	341
	保存		0.9	0.2	8.7	4.5	0.2	0.5	0.2	426
	非保		0.0	0.0	1.9	1.9	0.0	0.0	0.0	52

\* 表8-11は表8-5において該当者がゼロの項目を除いて集計した。

表8-12 アイヌ文化の将来の体験希望分野の規定要因 単位：%、人

		カムイノミ	伝統的婚礼・ 地鎮祭・ 新築祝い	伝統的な 葬儀・先祖 供養	イナウを 捧げる	神聖な場所 への祈り	海・川・山 でのタブー <sup>や約束事</sup>	まじない・ トゥス
体験	ホワイトカラー職	1.1	1.1	1.1	1.1	3.3	3.3	1.1
	ブルーカラー職	2.9	0.0	2.9	0.0	1.0	2.0	2.0
希望	義務教育	1.8	1.8	1.8	0.0	1.8	0.0	0.0
	大学（大学院含む）	4.0	0.0	1.0	0.0	2.0	2.0	0.0
	交流有	18.8	6.3	6.3	12.5	25.0	12.5	12.5
	交流無	1.7	0.4	0.9	0.0	0.9	1.9	0.6
	男性	2.4	0.0	1.5	0.0	2.4	2.9	1.0
	女性	2.1	1.0	0.7	0.7	1.0	1.7	1.0
	残っている	2.9	1.4	2.2	0.7	2.9	6.5	1.4
	非・残っている	2.1	0.3	0.6	0.3	1.2	0.6	0.9
	保存すべき	2.6	0.5	1.2	0.5	1.9	2.6	1.2
	非・保存すべき	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		夢見を大事にする	アイヌ語	ユカラなど 口承文芸	歌と踊り・ 樂器	工芸（編み 物・刺繡・ 織物・木彫）	伝統的 狩獵・漁法	伝統的な 料理	その 他	回答 者数
体 験	w	0.0	6.6	1.1	2.2	14.3	5.5	13.2	0.0	91
	b	2.0	2.9	1.0	3.9	8.8	3.9	2.9	0.0	102
希 望	義務	0.0	5.3	1.8	7.0	3.5	0.0	1.8	1.8	57
	大学	0.0	8.1	5.1	3.0	14.1	6.1	11.1	0.0	99
交有	交有	6.3	31.3	6.3	12.5	18.8	6.3	18.8	0.0	16
	交無	0.4	4.1	1.7	3.7	10.2	2.8	5.4	0.2	462
男性	男性	0.5	6.3	2.4	3.9	7.3	5.8	6.3	0.0	206
	女性	0.7	3.8	1.7	4.2	12.9	0.7	5.2	0.7	287
残る	残る	0.7	5.8	2.9	0.7	10.8	4.3	9.4	0.0	139
	非残	0.6	4.7	1.5	5.3	10.0	2.3	4.4	0.3	341
保存	保存	0.7	5.6	2.1	4.5	11.7	3.3	6.6	0.0	426
	非保	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	52

表8-13 アイヌ文化の情報源の規定要因

単位：%、人

	家族や 親戚	近所の人	友人	学校の 授業や 行事	アイヌ 文化を 普及して いる団体	情報 メディア	施設や 展示物	その他	回答者数
ホワイトカラー職	5.5	1.1	2.2	22.0	4.4	29.7	28.6	8.8	91
ブルーカラー職	0.0	1.0	0.0	7.8	2.9	17.6	20.6	6.9	102
義務教育（旧制高等小学校含む）	1.8	0.0	0.0	1.8	5.3	14.0	19.3	5.3	57
高校（旧制中学校、旧制高等女学校、師範学校含む）	3.2	1.2	3.6	10.4	3.6	25.5	27.1	6.0	251
専修学校（専門学校）専門課程	5.1	2.6	2.6	12.8	5.1	23.1	33.3	5.1	39
短大・高専（旧制高校含む）	7.5	0.0	2.5	7.5	2.5	32.5	37.5	7.5	40
大学（大学院を含む）	4.0	0.0	1.0	24.2	4.0	31.3	28.3	6.1	99
その他	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0	0.0	0.0	2
交流有	6.3	0.0	18.8	18.8	18.8	18.8	43.8	6.3	16
交流無	3.5	0.9	1.9	11.7	3.5	26.0	26.4	5.9	462
男性	2.4	0.0	1.5	13.1	3.9	26.7	22.3	5.8	206
女性	4.9	1.4	3.1	11.5	3.8	25.4	31.0	5.9	287

### 第3節 交流および文化との関わりをめぐる語り

#### 第1項 アイヌの人々との交流

市民とアイヌの人々との交流をとらえる視角としては「学校」「職場」「日常生活」「結婚」という4つの場面に着目する。先行研究においてこの4つがアイヌの人々の被差別経験の主な場面とされてきたことから、以下、この4場面における市民の立場から見た交流の様相を探る。ただし、当地では交流が非常に低調であることを考慮し、交流経験のエピソードだけではなく、アイヌの人々との交流認識、アイヌの人々への差別や特別視も含め、その周辺の語りもみていく。その際、都市部調査である札幌市調査においてはインタビューデータが得られていないため、インタビューが実施されたその他の先行調査から得られた知見を参照することにしたい。

はじめに、アイヌの人々について訊ねた際、彼らについて何も知らない・彼らと自分たちのど

こが違うのかわからないという「当惑」に近い答えがひとつならず聞かれたことを指摘しておこう。具体的には、「アイヌの人たちが普段どんな生活をしてるのか、どんなことで困っているのか、何を求めてるのかとかっていうのをほんとわからないです。会ったこともないっていうところが、まあ原点にあるんですけども」（壮年女性）、「アイヌの人って今どういう服装で生活しているかどうかもよく私わからないんです。テレビに出ているああいう昔のこういう衣装で生活しているのか、普通の私たちと同じ衣装で生活しているのか、ちょっと私も知識ないんで」（壮年男性）、「同化してしまってね。だから、いまアイヌどうのこうのと言っても、祖先がそうであろうと、今は同化して、（違いが）ないのだから、同じじゃないかと思うのですけれどね」（老年男性）といった言葉である。これは、市民にとってアイヌの人々が日頃の関心の外にあるということであり、アイヌの人々との隔たりの大きさを思わせる言葉といえるだろう。しかし、このような発言がある一方で、交流経験についての語りもある。そこで、上記4つの場面それぞれについて交流経験を確認する（表8-14）。すべての発言が過去の交流を回顧するものであり、現時点でのアイヌの人々と定期的、継続的に交流をしているという話は聞かれなかった。

まず、学校での交流をみる。一覧すると、学校でのアイヌの人々との出会いは現在の友人関係につながるものとはなっておらず、過去の思い出の一片として語られる言葉が多い。おもなものは、アイヌの人々が住む地域の小・中学校でアイヌのクラスメートと一緒にだったという内容である（4,6,7）。アイヌのクラスメートについては、「濃い顔」「毛が濃い」という外見的特徴が印象に残っており、自分とは異なる人々と認識されていたようだが、それが差別につながったわけではなく、子ども同士「普通に」遊んだ思い出として語られている。この「普通に」という語は、先行調査のインタビューにおいても、和人住民がアイヌのクラスメートとの付き合いを語る際に頻繁に聞かれた語で、「自分は差別することはなかった」「自分は偏見をもつことはなかった」という主張を含意している。当地でもこの語は同じ意味で使われていると考えてよいだろう。それゆえ、自分が差別に加担していたかもしれない可能性を振り返ることもなく、アイヌの友人をいじめるクラスメートに対抗して喧嘩をしたエピソード（10）を除いては、クラスメートへの差別を傍観者の立場から語るのみである。これは、ある種の無関心、無頓着といってよい。

しかし、当時は傍観者であったとしても、この度のインタビューを契機に当時を振り返り、「本当にいるんだ、こういう人は」と思ってしまった当時の自分を「浅はか」だったと語る者（1）もいる。また、アイヌと名指すことが差別となってしまった当時を思い起こして、「「あの人、アイヌだよね」と言うのが差別的なふうになっちゃうというか、何となく自分の中にも（そういう経験が）あるんですよね。だから、（アイヌだと）言っちゃいけない、でも、そうじゃないんだよなという気持ちはあるんですけど（自分には差別することへの違和感もある）」（括弧内は筆者による補足）と語る者（2）もいる。これらは、交流の経験がアイヌの人々に関する自分の認識の見直しにつながっている例である。

次に、職場での交流としては、土木関係の仕事で地方に滞在していた折に、仕事の一環としてそこの祭りに参加してアイヌの人々と出会った思い出（13）と、自営の飲食店の客であったアイヌの人々と音楽（アイヌの音楽を含む）を通じて交流が続いた経験（14）があげられている。一般に、職場での交流といえば職場の同僚との付き合いが一番に思い起こされるが、これらはそれとは異なる類の関係である。ともに仕事をきっかけとする交流ではあるが、地域の行事あるいは

趣味の世界における交流ともいえるものである。アイヌの人々との関係における親しさという点からいえば、この2つの交流はまったく異なっており、地域の祭りに参加したと回答している者の場合は、その出会いが個人的な友人関係に進展することはなかったが、音楽活動による結びつきについて語る者の場合は、その後しばらく交友が続き、それは懐かしく忘れがたい思い出くなっている。

続いて、日常生活における交流をみる。ここに分類される語りとは、主には、幼少の時期を過ごした地域にアイヌの人々が暮らしており、日常生活のなかで近隣のアイヌの人々との関わりを経験したというものである。木彫りの作業所で働くおじさん、駄菓子屋のおばちゃん、近くの工場で働いていたおばあちゃんといった特定の人物が記憶に残る存在して登場する。こうした近所付き合いについては、当時の大人たち（親）がアイヌの人々に向けていた感情についての記憶も鮮やかに残っている。子どもは大人の言動をよく観察しており、とくに、否定的な感情に敏感であったことは、これまでの調査においても観察されているところである。大人になってからの交流としては、ダンスが縁でアイヌの人々とつながりができ、イベントを行ったというケースが一例あった（19）。

4つめの、アイヌの人々との結婚については、先行研究において「結婚をめぐるダブルスタンダード」の存在が指摘されてきた。ダブルスタンダードとは、一般論としては、和人とアイヌの結婚を否定しないが、身内の結婚に関しては、アイヌとの結婚に後ろ向きであり、忌避感情が強まるということをいう。この態度は、アイヌの人々との結婚がどの程度現実的な問題として受けとめられているかによって異なるてくる。そこで、個々の発言をみると、アイヌの人々との結婚については「考えたこともなかった」「わからない」という言葉が聞かれる。これは明快に答えることへの躊躇であるが、この躊躇とは、建前と本音の間で揺れる不安な心境を示すものと考えられる（「自分がよければって思うかもしれないけれど、親の反対を押し切ってまで」（28）、「本人たちの問題じゃないのかなとは思いますけど…なんか娘に実際に影響があるんであれば」（30））。したがって、アイヌの人々との交流が乏しい旭川市民についても、結婚をめぐるダブルスタンダードの存在を否定することはできないといってよいだろう。

ここまで、「学校」「職場」「日常生活」「結婚」という4つの場面について、交流経験にまつわる語りを検討してきた。最後に、交流経験を語る者について、アイヌの人々との交流観に関する発言をしている部分を掲げる。注目したいのは、それらが、「アイヌの人々に敬意をもって接すること・アイヌの人々やアイヌの文化を特別の存在と見ること」と「アイヌの人々と和人とを区別しないこと」、このふたつをめぐる葛藤や迷いや願いを語る言葉である点である。先の「アイヌの人って今どういう服装で生活しているかどうかもよく私わからないんです」と述べていた壮年男性（交流経験なし）も同様のことを述べている。旭川市民のおよそ半数がアイヌ文化について「知識有」と回答する一方で、きわめて低調な交流実態があり、そうした状況においてアイヌの人々をどのように理解し、どのように交流するのがよいのか悩まざるを得ない姿が浮かび上がる言葉といえよう。

・交流する、しないっていうのはね、その人、人だから、っていう思いはあります。なんで、アイヌと和人だと、こう分けてするってこと自体がおかしいんじゃないかなという風に思って

る。そういう方（もっと自然に）がいいんじゃないかなとは思うね。（壮年男性 学校における交流経験有）

・やはり、伝統を守ってほしいのと、だんだんアイヌの人が少なくなっていく中で、うちらも接してというか、友だち感覚というのは言葉が悪いだろうけれども、そういう近い存在であってほしいなというのがあるんですよね。（壮年男性 職場における交流経験有）

・今、逆に、アイヌ民族の方が、普通に、私たちと同じレベルで生活しているっていうのを基準にすれば、それをわざわざ、あんたはアイヌ人ですか？和人ですか？っていうふうな事が、逆に言葉に対して失礼になるんじゃないのかなっていう。敬意を表したいですよね、私としては。そういうことを口走るっていうこと自体が差別に。そういったこと（アイヌとか和人とかっていうことで括ってしまうこと自体）を差別と世間では言うのではないんだろうかと。（アイヌの方が）いてもおかしくないし、隣にいたっておかしくないしね。…きっと今も末裔の方がいらっしゃるから、とても失礼な言い方になったら困るんですけども、やっぱりご先祖様的な、そういう認識ではあります。（壮年女性 日常生活における交流経験有）

・共通の何か部分であれば、その同じ場所にアイヌも和人も両方同じ所に集まって何か祈りをするとか。クリスマスと一緒にやれとは言わないにしても、なんかそういう神事的なことで共通的なことでやって差し支えないんであれば、別にそういう交流はあってもいいのかな。だって、同じ所に住んでいるわけだから。それでなんか思想がまったく180度違うんであれば、それは辞めた方がいいのでは。私自身、そこまでアイヌの根本的なそれを知らないので、具体的には言えないと。 （壮年男性 交流経験なし）

## 第2項 アイヌ文化との関わり

すでにみたように、アイヌ文化の「知識有」（51.2%）と「体験有」（12.7%）の落差が大きく（表8-5）、市民は、知識や情報が先行して経験には乏しい状態にある。そこで、市民とアイヌ文化との関わりを見るにあたっては、アイヌ文化についての知識を獲得した情報源としてあげられた上位3つ、すなわち「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」に注目し、この3つをアイヌ文化に触れる「きっかけ」と措定してインタビューデータを整理した。表8-15は、アイヌ文化との関わりの経験やその経験をもとにアイヌ文化について考えたことなどを訊ねた結果をまとめたものである。これら3つ以外からアイヌ文化との関わりをもったという場合は4つ目として「その他」に分類した。交流の場合と同様に、アイヌ文化との関わりを定期的、継続的に維持しているエピソードは得られなかったことを先に述べておく。

では、「施設・展示物」から順に確認していこう。利用したり見学したりしたことのある施設・展示物としては、各地の記念館や博物館、白老・阿寒・日高・登別などアイヌ縁の地、アイヌの石碑や立像（知里幸恵文学碑、シャクシャインの像）、JR駅構内の展示や資料コーナーなどがあげられている。なかでも多くあげられているのが旭川市博物館と川村カ子トアイヌ記念館であり、表8-8のとおりである。市民は、学校の授業・行事（後述）や普段の生活のなかで、

あるいは旅行先で、アイヌの衣装・生活用品・意匠などを見学したり、記念碑や人物像を見たり、アイヌの歴史を学んだり、さらには博物館などが主催する講座やワークショップに参加している。個々の発言を比べると、「施設や展示物はアイヌ文化をどう伝えるべきか」というアイヌ展示の根本にも関わる点については、多様な意見が聞かれる。アイヌ文化を「過去のもの」としてパッケージして展示するのではなく、現代に生きる文化、現代につながる文化として伝えていくことの重要性を主張するもの（4, 14）、一方通行的に「見せる」だけでは不足であり「体験」を伴うかたちでアイヌ文化を伝えることが必要というもの（17）、記念館や博物館の今の展示方法は「見世物」であり、こうした展示を「内地の考え方」だとして批判するもの（23）がある。これらの発言は、博物館や資料館において先住民族の表象を展示する際の難しさという問題にふれるものであり、先住民族の文化の位置づけや「るべき」残し方をめぐる問題にもつながるものである。

続いて、「情報メディア」からアイヌ文化の情報を得ているケースについてみる。利用している情報メディア、期待を寄せる情報メディアとしては、新聞、テレビ、インターネットはもちろんであるが、市の広報誌が多くあげられている。市の広報誌は、市民にとっては身近な媒体であることから、誌面構成、配布の仕方、配布場所などに関する「もの足りなさ」の指摘は、逆に、広報誌への期待の大きさを示すものともいえるだろう。その他、アイヌを描いた漫画やアニメーションがあげられており、これらの媒体が若い世代を中心に大きな影響力をもっていることがわかる（29,30,31）。北海道が、昨年より、アニメ作品「ゴールデンカムイ」とタイアップしてアイヌ文化をPRしていることは知られているところである。

3番目の「学校の授業・行事」に分類されるのは、そのすべてが、義務教育段階の経験として語られたものである。地元の小学校や中学校に通っていた折に、学校の授業や行事において郷土の歴史を学ぶなかで、アイヌの人々や文化について学習した思い出である。博物館や記念館を訪問したことでも語られているが、当時学んだアイヌ文化の知識や施設・展示物を見学した印象の定着度には個人差があり、その後、記憶が曖昧になっている者も少なからず存在する。

さて、市民がアイヌ文化に触れるきっかけは、上記「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業・行事」だけでないことはいうまでもない。それ以外の経路でアイヌ文化との関わりをもったという発言を「その他」としてまとめた。市民の経験は多様であるが、なかでも、「観光地の祭りやイベント」がアイヌ文化に触れるひとつのきっかけとなっていることはたしかである。パレードを見たり、アイヌの工芸品がお土産として販売されているのを見かけたりしたことが、振り返ってみれば、アイヌ文化との出会いを提供していたということである。ここには、観光地の宿泊施設にアイヌの意匠が使用されているのを見たという話（53）や、イベントにおいて、商品としてではなく展示の意図をもってアイヌ文化に関わるものが陳列されたのを見たという話（60, 69）も含まれており、それらを「施設・展示物」に分類することも可能だろう。この他、個人的な交友関係や趣味の活動や仕事のなかで、アイヌの文化にふれたエピソードがあげられているが、それらはすべて単発の、あるいは短期間の経験である。

最後に、これらアイヌ文化との関わりをより理解するために、アイヌ文化の位置づけ、その位置づけを根拠とするアイヌ文化の「るべき」残し方についての発言を整理して締めくくりとする。その前に、アンケートデータより、2点再確認しておこう。まず、アイヌ文化の現状と保存

の必要性に関する認識については、アイヌ文化を「現在も残っている」と回答した者はおよそ3割、「アイヌ文化を保存すべき」と回答した者は9割弱という結果である（表8-16）。また、アイヌ文化の残し方についての回答を数値が高い順に並べると、「国」55.8%、「地域」25.1%、「アイヌの人たち」15.3%、「その他」3.9%となり、国にリーダーシップを求める考え方が半数超を占めていることがわかる（表8-17）。さらに、1点付け加えるなら、世間一般のアイヌ認識の正確さに関する評価については、9割を超える人々が「わからない」あるいは否定的な回答をしている（「正しく知られていると思う」1.3%、「だいたいは正しく知られていると思う」6.3%、「あまり正しく知られていないと思う」44.2%、「正しく知られていないと思う」25.6%、「わからない」22.6%）点が注目される。これは、無関心だけを理由とするのではなく、表8-15で見たように、関心があっても情報を得る手段に辿り着くことが難しかったり、日常生活で得られる情報が不十分だったり断片的だったりする現状を示すものといえよう。

表8-16 アイヌ文化は残っているか・アイヌ文化を保存すべきか 世代別 単位：%、人

	アイヌ文化は残っている	回答数	アイヌ文化を保存すべき	回答数
青年層	13.0	69	83.8	68
壮年層	28.0	161	90.1	162
老年層	34.7	236	89.3	234
合計	29.2	466	88.8	464

表8-17 アイヌ文化をどう残すか 世代別 単位：%、人

	アイヌの人たちが残すべき	日本の国として残すべき	地域ごとに残すべき	その他	回答数
青年層	20.9	49.3	26.9	3.0	67
壮年層	13.0	51.6	31.1	4.3	161
老年層	15.2	60.6	20.3	3.9	231
合計	15.3	55.8	25.1	3.9	459

これらのこととふまえて、表8-18に掲げられた発言を眺めると、北海道の歴史への関心にもとづいてアイヌの人々やアイヌ文化への関心が深まってきた様子をみてとることができ。北海道150年事業が北海道の歴史や文化に人々の関心を引き寄せる契機となっていることはたしかだろう。多様な発言がなされており、アイヌの文化を残したり伝えたりするプロセスについては、行政のリーダーシップや下支えが必要、アイヌの人々の意志や要求が尊重されるべき、アイヌの人々の主体的な動きに任せる方がよい、など考え方はいろいろである。しかし、北海道の先住民としてのアイヌとその「失われつつある」文化を大切にしなくてはならないという点は、ほぼ共通するところといえる。

しかしながら、市民の言葉のなかには、和人がアイヌ文化の価値を認め、和人がその継承や保存に理解を示す（判断する）ことを当然視する和人優位の構図が透けて見えることもある。それは、社会において優位にある（と無意識に自分を位置づける）者の無自覚な傲慢、鷹揚さを纏った傲慢とでもいうべきものである。少し長くなるが、該当する箇所を以下に列挙すると、「かわいそうというか、もともといた人たちの文化とかは残していくべきじゃないのかなとは思うんですけど」（6）、「歴史から抹消されるのはありえないでしょ。…エイリアンではないですから

ね。架空のものではないですからね」（10）、「文明をもって乗り込んでるのと同じことなので、その文明をもった人たちがわざわざこう残せって言っているような形になっちゃったら、それは本当じゃないのかなって思うし」（18）、「とくに和人の方がやっぱりアイヌの文化とかそういうのやっぱり考えを理解する場っていうのが、むしろそっちの方が大事じゃないかなと私は思うんですけど」（24）、「復活というか、実際難しいと思うしね。今いる血混ざったひとたちがほとんどだと思うけども、普通の日本人の生活を望んでいるわけであって」（28）となる。

このように市民の言葉を聞いてみると、アイヌ文化が現在も残っていると考えるか、残っていないと考えるかの違いもそうだが、アイヌ文化を滅びゆく文化としてみるか、あるいは、時代に沿いながら進化し続ける文化としてみるかによって、アイヌ文化に対するスタンスはかなり異なってくるように思われる。それは、市民がアイヌの人々と交流する際の態度の基盤ともなる。

アイヌ文化を滅びゆく文化であると認識する場合は、「ホスト社会」側の和人としての責任感やノスタルジーが刺激されることにもなり（そのように認識することのはずは措き）、和人主導でのアイヌ文化「再発見」につながっていきやすいのではないだろうか。たとえば、アイヌ文化を称賛する声のなかには、和人の社会が文明化と引き換えに失った自然との親しい関係性を再発見する、というストーリーでアイヌ文化の魅力を語るものが見受けられる（9、12、26）。市民の発言を見ると、数としては、こちらの方が相対的に多い。しかし、こうした見方は、今を生きるアイヌの人々、現代社会におけるアイヌ文化への関心に支えられたものでは必ずしもない場合もある。「伝統？まだ続いているじゃないと思う。…伝統文化をオリンピックに使いたいとか。お前、そんなの宣伝に使うなよって言いたくなる」（29）という言葉に表れている苛立ちとは、北海道や旭川が「内地の考え方」と同じような考え方をもつてしまつた結果、一方的にアイヌ文化の「保存」を語るようになり、アイヌ文化の素晴らしさを発信できていないことへの批判として発せられたものである。この他にも、アイヌ文化の展示の仕方について、「それは「あつたんですよ」っていうだけになってて、今生活してる人もいるんですよというところには繋がってはないんではないのかなっていう気がします」（表8-15（4））という指摘がある。アイヌ文化をどのようにとらえていくのがよいのか、議論を深めていく必要があるだろう。

## おわりに

以上、旭川市民におけるアイヌの人々との交流およびアイヌ文化との関わりを検討してきた。

まず、アンケートデータからは、第1に、交流が著しく低調であること（「交流有」がおよそ3%）が明らかになった。交流の内容は多岐にわたるもの、近隣や家庭というプライベートな領域というよりは社会生活のなかでより広く展開されていると推察された。第2に、アイヌ文化との関わりについては、およそ半数（51.2%）がアイヌ文化の知識をもつ一方で、体験したことがある者はその4分の1（12.7%）にとどまっており、知識と体験の不均衡という結果が得られた。その際、知識・体験・将来の体験希望において選好される文化の内容とは、宗教的行事というよりは生活文化的なものであった。また、アイヌ文化の情報源の上位3つは「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」であり、パーソナルな関係よりもフォーマルな経路でアイヌに関する知識が取得される傾向が認められた。第3に、アイヌ文化との関わりを規定する要因に関しては、ホワイトカラー系統の職業に就く者、学歴がより高い者、交流がより多い者、「アイヌ

文化は現在も残っている」と回答する者、「アイヌ文化を積極的に保存すべき」と回答する者ほど、知識有・体験有・体験希望有の数値が高いことが明らかとなった。男女では選好されるアイヌ文化が異なることも示された。情報源については、ホワイトカラー系統の職業に就く者、学歴のより高い者において、「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」から情報を得る傾向がより顕著であることがわかった。

次に、インタビューデータからは、第1に、「学校」「職場」「日常生活」「結婚」という交流の4場面に関して、アイヌの人々に対する無関心・無頓着・無自覚の優位意識、結婚については「ダブルスタンダード」が見出された。第2に、アイヌ文化との関わりについては、そのエピソードの多くは「施設・展示物」「情報メディア」「学校の授業や行事」をきっかけとしており、個人的な関係のなかでアイヌ文化と関わりをもつケースは多くはないことが確認された。そして、第3に、アイヌ文化との関わりを支える意識に関しては、アイヌ文化を大切に思い、アイヌの人々の意志を尊重しながら保存の途を探ろうとする一方で、文化としての価値を認め、継承や保存に理解を示すのは何よりもまず和人である、という和人優位の意識も存在することが明らかになった。

旭川市民にとって、アイヌの人々に会う経験が得られる場は、主に、施設・展示、学校の授業や行事、あるいはイベントである。したがって、市民にとってのアイヌの人々との「交流」は、友人や隣人との「交友」というよりは「文化交流」、もっといえば、自らをアイヌ文化の消費者として位置づける関係として主に想定されているといえるだろう。アイヌの人々に対して普段感じていることを最後に問われ、ある老年女性は、「とくに感じてることは、実際近所にいないしね、とくではないんですけども、文化継承お願いしたいわ」と答えている。旭川市民のアイヌの人々およびアイヌ文化との距離感を端的に示す一言といえる。こうした現状において、市民がアイヌの人々とフラットな関係でより親しく交流し、アイヌ文化をめぐってより協働的でより豊かなつながりを築いていくには何が必要なのか。今後の検討課題としたい。

表8-14 アイヌの人々との交流経験

学校
(1) 【中学校の発表会でアイヌについて勉強した時にアイヌのひとに会ったことについて】すごい最初の印象は、髪がすごいっていうのを覚えていて。その当時、あと頭にも鉢巻きみたいなものを巻かれるじゃないですか。だから、みんな同じような格好をしてるから、私たちが制服を着るように、この人たちはそういう服を着るのが当たり前なんだなと思ったのを、すごく印象に残っています。「本当にいるんだ、こういう人は」というふうには思っちゃった。まだまだ、そういう昔の人って思っていたのかなって、そのころ。その当時は、たぶん、まだすごい浅はかに考えていて、今回のこのアンケートを通して、あのころは昔の人って思っていたけど、いまも普通に生活を営んでいる人たちなんだよなというふうには、やっぱり考え直させられました。 (青年女性)
(2) 中学校の時に、小学校・中学校1年ぐらいだったと思うんですけど、アイヌということで顔ですぐ分かるので、濃い顔をされていたので、それでうちのクラスはなかったですけれども、「あいつアイヌだよね」というような差別というかというのはあつたんですね。そういうのって何か言ってはいけないのか、「アイヌだよね」ということを。先住民とまた違うのかもしれないけれど、「あの人、アイヌだよね」と言うのが差別的なふうになっちゃうというか、何となく自分の中にもあるんですね。だから言っちゃいけない、でも、そういう偏見というか差別的なのが平気で行われていました。 (壮年女性)
(3) 私が小学校の3年生、4年生、ですから昭和40年前半くらいの時、小学校の時にアイヌ人にに関するアンケートがあって、すごいそのアンケートが印象的だったんだよね。「あなたはアイヌ人がクラスに転校してたら、一緒に仲良くやっていきますか」とか。当時としては、そういう偏見というか差別的なのが平気で行われていました。 (壮年女性)

(4) 同級生にアイヌが一人いたんだわ。子どもの頃でも会話も普通にしてた、普通だったからね、なんも、こういうのはなんもなかったと思うけど。覚えてるのは、ちょっと女子の子なんだけど、毛が濃かったなっていう印象しかないんですよね。あとは普通にみんなと一緒にいたから、ただちょっとこう、毛が濃いっていうだけしか印象ないですね。そういうこと（いじめ）はなかったですね。みんな一緒に。腕の毛とね、顔の産毛がね、こう髭があるような感じで、女の子なのに、すごく毛が結構あったな。でも、普通にね、それもなんか普通に皆で遊んでたから。

(5) 中学校の頃は、そういうアイヌとかなんもなかったですね。

(6) 身近に、その時も身近にいたから、だから周りもアイヌの子がいても、いじめたりってこともなかったんだと思うんだよなあ。その辺り（川村カズト記念館のあるあたり）って結構アイヌの人が元々住んでいたんですね。だからそういうアイヌの人と学校、クラス同じになんてね、そんな別に差別したりっていうのはなく、普段からこう目にして近所で遊んでたりっていうのもあるから、別に普通だったんですね。（壮年男性）

(7) （アイヌのクラスメートとは）あまりにも普通な感覚というか、みんな地元の日高町の古川町なんで、それらしきというか友だちでというか、そういうものでいた感じというか、アイヌというの（アイヌを区別して考えること）はあまりないです。（壮年男性）

(8) (クラスの) 本当に0.1%ぐらいでしたね。そんなにたくさんではないです。（アイヌであることを）みんな知っている状態ですね。（アイヌ語を）友だちと喋っていましたね、仲間の人と一緒に。ただ、何を言っているのか、よく分からなくなというものが現実的には。

(9) たとえば、泊まりに行ったりとか、中学生になつたら結構泊まりに行ったりとかするじゃないですか。「今度、うちに泊まりに来て」とか言っている時に、朝、やっぱり時間になつたらやっていましたよ。どんなお祈りなのは今はわからないんですけど。

(10) (アイヌの友だちをいじめている人にやり返すことを) やってましたよ。（アイヌの友だちを）めちゃくちゃいじめましたね。男の子が結構やっぱり多かった。女の子は「汚いから」とか、そういう言葉を使うので。「汚いからって、あんたのほうがよっぽど汚いしょ」っていう感じですかね。（老年女性）

(11) 高校の時のね、中学校、高校の時の楽器の仲間もあるんですけど、それがまた最初にアイヌのそういう血の混ざった人というかね。出会いなんですよもね、それまではなかったんです。…頭脳抜群で。それでね、その彼が言うには、自分にはアイヌの血が混ざっていると。して、皆さんご存知だと思いますけど、血が混ざった場合にね、ものすごく優秀な奴がね、遺伝のあれでね。（老年男性）

#### 職場

(12) 旭川 자체がそうなっちゃっているんで、（アイヌの人々とは）遠ざかっているような感じもするんで、やはり土木をやっていた時は地方ばかり行っていたので、その時はアイヌの人が近くにいるから、今は行者ニンニク、アイヌネギって、アイヌの人々が聞いたらあれかもしれないけれども、そういう言葉を使っちゃいけないと何かいうのがあったので、作業員を使っている時も、アイヌの人々も、アイヌのことを勉強しているよという人がいたので。

(13) お祭りで協賛とかするんですよ、地域貢献ということで。そうしたら、アイヌの人を呼んだりとか、そういうものもあったので。地方のお祭りで。発注者が諸官庁だったので、「地域貢献をどうしましたか」と言われると、どうしてもそういうのしかできないんですね。ボランティアしようにも、仕事をしながらボランティアというのができないので、そのお祭りに参加してみたりとか。土日に帰らず、そういうのを参加してみたりとかというのがあるので。そこでアイヌのお祭りも結構行きましたね。踊りはなかったけど、楽器を使ってやってみたりとか。（壮年男性）

(14) (一昨年、自営飲食店を閉める前は) 僕のサックスのファンだったの。店によく来てたの、阿寒からね。昔、ハーレー乗つてくるんだよ。それで、阿寒湖畔にね、3回か4回呼ばれてね、僕のライブやるからお客様集めるから来てくれって。これ、彼が僕の為にね、お客様集める為に自分で作ってくれて、阿寒の土産店売り場のあちこちにね、こうやって貼ってお客様を集めてくれたんだ。して、とにかく僕の楽器のファンだったしね、他にも知り合いいるけれどもね、全員揃ってね、音楽好きな人が多い。そしてね、人間的に純真っていうのかね。（老年男性）

#### 日常生活

(15) いつも通り道に熊の木彫りを彫っている作業所というか工場というか、小さいところなんんですけど、そこがあったので、そこによく遊びに行ったり、お風呂屋さんがあったんですけど、熊の湯という、そこもアイヌの方…はっきりわからないですが、そうだと思います。その方が経営されていたみたいな感じで、結構、近所にはそういう方がいたかなと思います。そこの親戚の子が同級生だったので、そのお父さん、先ほどの人が怖かったんですけど、たまに遊びに行って見せてもらったりとか、あと、いつもそこを通ると木彫りの木の匂いというんですかね、その香りがいつもしていたというイメージです。

(16) そうですね。身近にお友だちもいたので。今もお付き合いをしている友だちがいるんですけど、その人に直接聞いたことはないですけれど、でもやっぱり顔は濃いので、絶対にそうだと思うんですよ。一度も聞いたことはないんですけど。（壮年女性）

(17) うちの両親も普段はそういうアイヌ人に関する話題は家族の中では出ませんでした。ただ、何かテレビとかでアイヌ人の特集をやったりしていると、ちょっと母は差別的な所がありましたね。

(18) 小学生の頃に覚えているのは、駄菓子屋さんありますよね。5円とか10円とかで買える。あそこのおばちゃんはアイヌの方でした。私、ごめんなさい。専門用語は知らない。この。それをしていましたし、一生懸命、刺繡？アイヌの模様の刺繡をやつていて、私がたが行くと、それは10円とか5円とか言って、売ってくれたのを覚えています。（壮年女性）

(19) アイヌの楽器、トンコリとかを奏でる、オキさんていらっしゃるんですけど、ユーチューブで検索してくれたら何個か出てくると思うんですけど、その方とトルコのババズーラっていう民族舞踊を、楽器を演奏する方と一緒にライブをすることになったんですね。その時に、踊ってもらえないだろうかっていうことでダンサー何人かで行って、踊ったんですね。…その大きなイベントは1回きりなんですけど、個人的にね、繋がっているので、マウレウのコンサートに行ったりとか。一緒に。の方たちと一緒に歌ったり、踊ったりしませんかっていう方たちなので。…あと友だちが、結構アイヌのお友だちと知り合いだったりするので。何かその野外での大きなイベントの時には、そういう方たちを呼んで、まず儀式をしてもらってっていうのが、結構イベントでは、ちょっと一時期やっていたんですね。

(20) 子どもの時はいませんでしたね。こちらに来た時にご町内にいらっしゃいました。  
(壮年女性)

(21) 普段の生活の中で木彫ってるおじさんいたりとか、熊彫ってるおじさんいたりとか、そういうのが見てたから多分、普通だったんだと思うよ、それが当たり前で。

(22) 地元がむかわ町なんですよ。だから「むかわ竜（りゅう）」って大学でやりましたよね。あそこなんですが、あそこにもやっぱりアイヌの方が多いんですよ。

(23) うちらのところ（むかわ町）も、子どものころって結構アイヌの人たちが多くたんで、悪い印象ばっかり残っているんです。うちらのところ敵対の感覚みたいなものをもっていた時、人種差別というところが多かったのかな、昔はね。そんなにひどいわけでもないけれど、体臭が臭いとか。うちのお袋なんかは毛嫌いしちゃって、すごかったんですけどね。そういうところの対立が結構ありましたよね。

(24) 子どものころ、そういう人たちが結構優しかったということがあります。面白かったというような、お兄さんのみたいな、遊んでくれたみたいな。  
(壮年男性)

(25) 【母の実家の室蘭にアイヌの方がいたことについて】お婆ちゃんが働いていたから、そのところに布切れかな、何か布切れを集めて何かやっているんだけど、何をやっているかわからないんですけど、それをよくやっていました。布を何かたたんで積んでいって、みたいな。その工場に何か来ていました。働いていました。

(26) よく子どもが小さいころに入れ墨をしている人がお風呂に入っていて「あれ、なあに？」って指さすじゃないですか。ビシッと叩いて「そういうことを言っちゃいけません」と。  
(老年女性)

(27) （石狩川でウグイを釣り）大漁だったので、このウグイ、どうしたら良いだろう。また、バルブの排水でおいがきつくて食べられないのですよね。すごいにおいしたんです。それを、お互いにそういう話したら、（付近の人に）「近文のアイヌの人を持っていけ。平気で食べるんだから」と、そう教えられたことありましたよ。人に渡して、アイヌの人に行く用事あるからって（中学生くらいの人に渡してアイヌの人に持って行ってもらった）。

### 恋愛・結婚

(28) 考えたこともなかった。ただ、アイヌの人と会って、アイヌの人と結婚したいと思ったら、やっぱり自分だけの気持ちで結婚を決められなかつたかもしれないと思って。家と家っていうことになる。結局、ゆくゆくはきっと親より生きるから、自分がよければって思うかもしれないけど、親の反対を押し切ってまで、そうなった場合、結婚するかしないかはわからない。

(青年女性)

(29) とくに、なんか、自分の身近にそういう方はいらっしゃらなかつたんで、まったく。これはなんか考えたことはなかつたですね。でもただ友人の中に、うちの主人のお母さんはアイヌなんですよっていう方がいらっしゃったんで、「あ、そうなの」っていう感じでしたね。…友だちはそうですね。富良野に在住してたんですけど、ご主人のお母さんは札幌に住んでおられたんですけども、そななんですよって。だからすごく、何て言うんですかね、お顔とかにすごい特徴があってねっていう話は聞きました。実際見たことはないんですけど。

(30) それはなんか、本人たちの問題じゃないのかなと思いますけど、ただ、なんかそういう親子関係とか、相手の方の生活環境とかが、なんか娘に実際に影響があるんであれば、本当に大丈夫なの？って自分の意志をよくよく確認、多分したと思います。  
(壮年女性)

(31) 身近じゃないから余計思うのかもしれないんですけど、身近だったらわからないかも知れないんですけど、別にそれがいじめの対象になるのかっていうのすらよくわからない感じ。それは、それぞれ、いろんな個性と同じなので、特別問題はないと思うんですよね。

(壮年女性)

(32) 別に関係ないです。アイヌだろうが何だろうが、好きになったら。（子どもの相手がアイヌの方だったら）全然、大丈夫です。まあ、なってみないと。

(壮年男性)

(33) ポロトコタンに行ったりもして（ライブをした）。あそこの中の方々とお会い、何回かしたりしてて、まったくゼロ。文化に対してゼロではないんですよね。ま、そこまで知ってもないんですけど。それで、話しても別に嫌じゃないですし。だから息子がそういうことに、誰か連れてきたよって時にアイヌの方だったとしても別に本人がよければそれでいいっていう風にしますか。

(壮年男性)

(34) それが現実の話として出てきたら、やっぱりちょっとは心が動くかも知れないね。でもね、今もう、2018年かい？私たちが旭町で生活してた頃とは全然違うから。…今だったら、息子がそう言ってもそんなに反対はしないかも知れないけど、わかるないい。

(老年女性)

(35) どうでしょうね。多分というか最近こういうことを本当に考えると、結構、早々近づかなかったかな、だからっていうのはあります。恋愛になるとかならないとかっていう前に、多分壁を作っていたんじゃないかな。私たちって、結構世代的に知らないうちに偏見とかそういうのを植え付けられていた部分であるので。ていうのは、なんだかわからないけど、なんか違うっていうことを。自分たちは違うんだっていうことを、いつからかわからないんですけど、やっぱりあるんですよね。それがやっぱりこの辺、自分が住んでいた周りにはあったんだろうなっていう感じが。もしも、私がそういう相手を連れてきたとしても、親が絶対許さなかっただろうなみたいのはありますね。10年ぐらい前だったら反対していたと思います。この年になつたら、人間性でしょって思いますけど。ただやっぱり人間性もありますけど、生まれ育った環境があまりにも違い過ぎると、何でしょうね、同じ生活で、レベルっていいたら変な言い方かもしれないんですけど、考え方方にこうひとつの家庭を作れるのかなっていうのが。たとえばアイヌの方だったとしても、どういう育ち方をしたかっていうことで変わるんじゃないかなと思うんですけど。

(老年女性)

(36) あまりふれ合ってないから、どういう人かっていうのがよく分かってないんで、まあ100%いいよっていう話にもならんのかなあと思いますけど、人となりとか文化とかはまったく私も分かってない。…意識はしてなかつたっていうか、あんまり、アイヌの方いるってのは知つたけど、あんまり、私自身としては意識あんまりしてなかつたっていうことで。

(老年男性)

表8-15 アイヌ文化との関わりの経験

施設・展示物
(1) 駅になんかあったかなとか【アイヌ情報展示コーナーの像】。織物の柄があった気がするなど、どっかで見かけたかなという気はするけど、足は止めないかもしれない。
(2) あの白老の方に、アイヌの方たちの、なんか文化施設みたいのが今度新しくなるとか、元々あるものもあったりとかして、そういうのは観光的な感覚で見に行ってみたいなとかっていうのはありますね。
(3) 日高とかあちらの方ですと、そういうなんかアイヌ文化みたいのが結構あったりとかして、観光で行ったことはありますね。あの、様似とか向こうの方には行ったことがありますね。
(4) 道内旅行してて、そういう博物館系とか色んなちっちゃい町のとかでも行くと、必ず、アイヌ文化とかアイヌ民族の方たちの衣装だとか、あと生活用品だとかっていうの展示のコーナーっていうのは必ずあるんですよね。それだけ北海道には、たしかにアイヌ文化、あったんですよっていうことはすごくわかるんです。わかるんですけども、じゃ今、え、それは「あったんですよ」っていうだけになってて、今生活してる人もいるんですよというところには繋がってはいないんじゃないかなっていう気がします。それについて何か意識してる人たちも多分いないんじゃないかと思う。…北海道博物館とかでも行ってちょっと色々な展示を見てきたなかでも、松前の方からこう入って来て、アイヌの人たちが生活してるところを、その生活を無理矢理変えているとか、なんか色々なものを貢がせたりとかっていうのがあったっていうそういうのを見て、そうだったんだっていう。じゃあこの人たち、今どこに行ってしまったんだろうね。今現実にこの人たちがいるのについてうところなんですかね、私のなかではですね。
(5) 知らない子どもたちも多いので、夏休みの何かいろいろな博物館とかでもたぶんイベントをやっていると思うんですけど、公民館とか、そういうので刺繡とか何かありますよね、そういうのをみんなでワークショップみたいな感じでやってみるとか、そういうので残していくのはどうなのかしら思つたりですね。プレスレットとかありますよね。
(6) (アイヌの伝統文化を直接見たことは)ないです。よく阿寒などに泊まりに行つたりしていたんだけど、そこでもありますよね。アイヌのお祭りみたいなのは見たことはありますけれど、直接、家の近所でというはないですね。熊彫りとアイヌ記念館に何回か遊びに行っているというぐらいですね。
(7) とくに感じていることはないですけれども、少なくなつていく上で、やはりそれはしょうがないと思うんですけど、どんどん血筋が薄くなつていくという感じではあると思うんですけども、いままであったような記念館とか白老とか阿寒とか、そういうのは残していってほしいなというのはありますね。
(8) クリスタルホールに資料館っていうのがあって、そこにカ子ト記念館の何点かを展示しているんですね。それをずっと見て歩いていた時に、そのアイヌの方たちが自然と共生してたというところをずっと説明してくださるんですね。それがすごく、その形の祈りだつたり、生贊っていいたら多分あったと思うんですけどね。その小さい熊をとか、いろいろあったと思うんですけど、多分それの本当の解釈っていうのかな。生贊っていいたら言葉だけにするとすごくマイナスイメージの印象があるんですけど、多分そういう事ではなかったような感じはするんですね。生贊っていうのが。きちんと理解するっていうのは大事かなって思うんですよね。
(9) なんでもそんなんんですけど、何もそういうのに参加することなく今まできたので、ちょっと何かなんだか講座みたいな、色んなのがあつたら行ってみたいなとは思つたりはします。そのなかで、アイヌの方の(講座)があつたら多分行つてみたいなつて思うんだろうなっていう感じですかね。

- (10) (この地域には) 知里幸恵さんの記念碑とかそういうのがあって、娘も近くの中学校ですから。この地域はそういうたゆかりですね。ここずっと行ったところはアイヌ人墓地もあるし。(アイヌ文化に触れる機会は) 多かったと思います。
- (11) 今、私たち中高年で旭川にお住まいの方で、旭川で小、中学校で、必ず目にしていると思います。何かしら。そういう民芸品、工芸品。必ず。あ、これアイヌの民芸品だね、文様だね。旭川、優佳良織工芸館というのも有名で。台場にあるんですけど。優佳良織工芸館ていうのは、旭川の大雪山の四季折々を織物にしたものですが、織物云々もアイヌの文化の継承からきたものだと思いますよ。
- (12) 今までずっとシャクシャインの像は、勉強ではしていたんですけど、見たことがなかったんですけど、ちょっと時間があつて、初めてシャクシャインの像を見てきましたね。うちの主人も一緒になって読んでもました。この人外国人か?って言ってましたけど、違うよって。この人はアイヌの首長さんだよっていう感じ。  
(壮年女性)
- (13) 子どもに聞かれて「答えられないの?」というのがあるので、親としては調べてでも。下に嫁さんの親が住んでいて、結構子どもが小さい時にアイヌの、何というんだ、あそこの川端というか、北門のところのそこに行ったりとか、あとはユーカラ織、そこもアイヌのあれなので、そこに行ってみたりとかしていたんで。  
(壮年男性)
- (14) (川村カ子ト記念館について) あのイメージとしては、これはまったくもって僕だけのイメージかもしれないんですけど、ただの博物館のようなイメージなんです。だから、ボロトコタンとか二風谷ってやっぱりいらっしゃるっていうイメージで。彼らの土地っていうイメージがあって、アイヌの方々がいたんだけど、記念館ですっていうイメージでしかない。そこでアイヌの人がいて、そこで文化的な活動があったりとか人がいたり、みたいなではあるけれども、記念館だとこう過去の話、みたいな。  
(壮年男性)
- (15) 旭川電気軌道さんが市内観光バスっていうの、運行してたのね。で、それに乗りましょうってね、だから色んなとこ行くのよ。あの川村カ子トさんのこととか、男山とか、あとは、どこ行ったのかしらね。そんな時ね、ちょうどこの方(砂澤クラさん)いらしてたの。で、一緒に写真撮らせて下さいって、そしてね、本もすでに出てた後なので、「読みましたよ」ぐらいの言葉しかかけられなかった。
- (16) 本州の親戚が来たら、直接川村さんの、なんちゅうの、あそこ、北門町のあそこ(川村カ子トアイヌ記念館)は何回か行きましたね。親戚の方お連れしてね。ウポボ踊りだと、鶴の舞だと色々ね、やってましたね。
- (17) たまにはテレビでちょっと見るぐらいで、ほんとに交流がされてるっていうんじゃなくて、片道切符のような、見せる、見せられるっていうことが現実であって、直接一緒になってっていうのはどうなんでしょう。あんまり感じられませんけどもね。公民館活動なんかでも、文様を作りましょうとか彫り物しましょうぐらいでしょ、今ならね。それは続くでしょうけども。やっぱり、狩猟生活なんか、もっと語り継がれてもいいんでないでしょうかね。  
(老年女性)
- (18) 絵本でアイヌの絵本とかいろいろあって、ちょっと知りたいなと思ったんですけど。何年か前に博物館の方でもアイヌコーナーがあって行ったんですけど、それはもう世間話みたいな感じで、辞めちゃったんです。それで、ラジオでもやっているって聞いて、ちょっとそれも興味を持ったんですが、地域によって違うっていうのを知って。ちょうど川村カ子ト記念館の方でやっているってうかがって何回か行ったんですけど。
- (19) 私も何かしたい、何か知りたいって思っても、窓口がなかった。川村カ子ト記念館、アイヌ記念館も行った事なかったんですよね。なんとなく近寄り難くて。たまたまそういう人(副館長)がいて行くことができたので。窓口っていうか、遠巻きに何となく見るんじゃなくて、ちょっとでも近づくことを、いろんな所でいろんな人がやっていたら、違うのかなと思っていて。
- (20) 札幌なんかも地下歩行空間、チカホで何かやっていたりしますよね。あそこ行って見てびっくりしたんですけど、普通にそういうのを売っているんですけど、こっちに来ると、そういう近文アイヌ発祥は旭川なんだよ、とかって言っているんですけど、言われるまで知らない、知る機会もないとか。そういうことを広めたり、いろんなもの売っているんですけど、そういうのを広めるったら変ですけど、機会があったら、こういうのあるんだねっていうことを広く知ってほしいなって。いるの自分も知らなかつたので。
- (21) 観光なども、今アイヌ記念館で木彫りのものとか売ったりとか、あとは踊りの体験とかしているんだけど、これは個人でやっているものなんんですけど。だから博物館ぐらいなんでしょうけど、本州方面からの何かどこに行ったら何があるって訊かれた時に何もないっていうのが、やっぱりあるので。市で何とか後ろ盾とか、なんとかするとかしてくれればいいのかなって思いますけど。  
(老年女性)
- (22) 北大の植物園に行って、あそこの札幌のね。そしたら昔の、今あるかどうかわからないけど、その堅穴式住居のね、そういうあれがあってね。あとそういう展示館みたいなところがあって。植物園の中にね。それを見た程度です。知識はね。  
(老年男性)

(23) 川村（カ子ト記念館）。あれじゃ見世物じゃんと思うんだよな。それでお金をとる所でやつたら見世物じゃない。…何か所かあるんだけど、どつかそこら辺の博物館の中でのアイヌをちょこっとあるのを見て、あーこの程度しか保存、展示されてないんだなっていうような、そういうことしか見ていない。それだからね、今、旭川もやっぱり他の内地の考え方と同じような考え方を皆持っちゃっているのか。…先住民族としてっていう考え方がもう違うんじゃないかな。かえって、アイヌという言語を使う人たちとして、そういう何て言うの。ただ地域が今こうやってバラばらになっちゃっているけど、そこでひとつ逆にそこに何かいいものってないかな。その言語にいいものってないかな、とかさ。ひとつの言葉すごい楽しみ、表現の仕方とかさ。すごく、とってもアイヌの表現と実際のそれがいいなっていう（のがある）。本当にほんとうに大雪山系というものを神々の遊ぶ地域という言い方があるという。そういう感覚がもっともっといい言葉を捨て。その何て言うのかな、もつと今の時代、細かく細かくなりすぎて、おおざっぱない表現でいうのが、そういう昔の頃はいいものがいっぱいある。それなのに、何となく日本語に漢字に置き換えてっていうような流れに。そんなことを…。もっともっといろいろなアイヌということにに関してやっていくんだったら、そういうやり方もあるんじゃないかな。

(老年男性)

**情報メディア**

(24) 観光とか街づくりですよね。なんかアイヌの文化施設が近文の方にあるようなんんですけども、まったく足を踏み入れたこともなく、あそこにあるんだっていうだけで、入ったことがないし、何か所一体市内にあるのかもわからなく…なんか旭川市って広報みたいのを出してますけども、そんな中で、私もペラペラっとしかちょっと軽くしか見ないんですけども、アイヌ民族、文化についてなんかそういう交流がありますとか、そういうのって、何か記載があったかなっていうか、ほんとに観光や街づくりにそれを取り込んでいきたいんであれば、やはりお知らせすることは大事なんではないかと思うんですけども。（壮年女性）

(25) やっぱり旭川市はある程度アイヌ文化についてはやっているとは思いますけれども。もっとやっぱりアイヌ文化を残していく。もっと、ただ、あのそれを継承している人たちが少なくなつて高齢なので、何か映像とかいろんなもので残しておいていただければと思います。

(26) 今、漫画を知っている、ゴールデンカムイを知っている年代の人たちであれば、アイヌ人でいう名前も知っているし、こんな感じ。あれはちょっと。私、この間アニメを見せてもらったんだけど、大分イメージ違うよね、女の子もね、女の子も小さく書かれたりとか。

(壮年女性)

(27) （情報がこないのかという問い合わせに対して） そうなんでしょうね。探していくばっっていうのはあるんだと思うんですけど、こういうのって別にすごい外に向けて発信を、っていうわけじゃない感じじゃないですか。だから、自分もそれを探さないから、多分そういうのも見つからないのかなとは思いますが。何かの関心をもって調べるっていう風にならない限りは、一生多分何も繋がらないのかなって。ただ変な話が、別に旭川市がとくに何かをしているっていうのもまったく感じない。だから、多分それは知らないだけなんでしょうけど、特別何かしているのかって言ったら、していないような気はします。毎月せっかくそれ（市の広報誌）を出しているんであれば、端から端まできちんと毎月読んでいるかって言われたらそうでもないんですけど、別にそういうコーナーがあつてもいいんじゃないかなと思いますけどね。

(壮年女性)

(28) どうしてもいいことと悪いことっていうのは必ず並行的に残っていってしまう。そこに、そういったものっていうのを、声を上げたい方がいるんだろうかなって。二風谷の問題にしても、やっぱりそういうもの。そして新聞で取り上げることはいいことだと思いますよ、ああいう風に。誰かがそういう風に、誰かが心の声を言葉にしたら、それを広める人が必要だと思います。と、私は思っていますね。

(壮年女性)

(29) （ゴールデン） カムイ読んでたから。

(壮年男性)

(30) 子どもが最近習ってきたので、それで。ちょうどテレビでゴールデンカムイってアニメがやっていたんで、「こんなんだよ」というのを。…結構、子どもも録画して見てるような感じだったので。夜中にやっていたので、見られないので、一緒に家族みんなで見て、「こうだよ」「こうなんだ」「勉強した通りだね」「学校で習ったのが出てきた」というのもあったので。

(壮年男性)

(31) テレビでもよく見ますので、「こんなこともあるんだ」とか、芸術家もいますよね。そういうところは、「すごいんだ」と思って。あと、1番なのは、映画の中の、アニメの中で、『カムイの剣』という、角川文庫で出していた、あれが好きなんですよ。たまに見たいなと思うんだけど、置いてないんですよね。あと、いろんな映画だと、ああいうものが大きいですね。眞実を述べているのか、大きくやっているのかわからないですけどね。

(壮年男性)

(32) たとえば、旭川に広報が、広報誌が来ていますから、そこでもっともっと。とくに今年は北海道150年、命名150年ですから、その元になっているのは、やっぱり彼らの文化ですから。それを前面に出せば、もっと知らしめることになるなと思いますよね。人々、彼らが先住民族ですからね、そこにわれわれが乗り込んだようなのですからね。その元になっている言葉っていうのがあるので、それはこの機を逃さず、知らしめたらいいのではないかと思いますよね。

(壮年男性)

(33) もう最近ですよ。ここ2、3年ぐらい前からですね。北海道の150年が近いっていうことで。人々歴史的なことは好きだったので、北海道も含めて、北海道に限らず、いろんなことはつねにいろいろ勉強していたんですけど。少しでも道職員であれば、北海道のことを一つでも知つておかないとさ。ただ転勤だけして、給料もらって、偉くなつて、知らんけど、結局その地域の事まったく知らないで、ただ退職するなんていうのは、姿勢としてよくないんじゃないかなっていうのがあって。かなり前、さつき2、3年前って言ったけど、やっぱり10年ぐらい前からですかね。その北海道史を勉強して、今もその毎日読んでいるんですよね。

(壮年男性)

(34) ニュースとかなんかそういう熊送りとかやった時にカムイコタンの辺でやっているとか、多分ニュースとか新聞とかで出ていたのを見て聞いて、こんなことやっているんだ、アイヌの人たちはっていうの遠巻きに見ていたんだなっていうの思います。  
 (老年女性)

(35) 広報でも副読本でもいいから、やっぱりその先住民族がいて、和人が入って来て、そこでどうなった。それで、アイヌがどういう扱いを受けたとか、そういう不当性とか多分あるんだろうけど、そういう情報っていうのは、自分から求めない限り、今はいですね、そんなものってね。もし、やるとすればそんな交流とかやる前に、そういう理解を深める方がまず、私は、先だと思いますけどね。

(36) (アイヌの問題に関してインターネットで)いろいろな発信の仕方をうまくしていけば、観光やなんかに関してもうまくつながっていくだろうし。あと、アイヌの人同士のつながりもインターネットでやっていけば、それこそ北海道のなかの、一部分の所に小さく固まっているのが、点々としているのじゃなくて、北海道全部の塊ができるんじゃないかなと。

(37) それから海外から来てここで働いている人たちに、観光に関して、ここに行ったらいいよ、あそこ行ったらいいよ (というのを) 地元の人達に発信させる。  
 (老年男性)

#### 学校の授業や行事

(38) (北見の端野町に) 町の民俗資料博物館というのがあって、それが鎖塚っていう網走監獄の囚人がつくった道路に関する資料館だったり、あとはもう一つが、そのアイヌ民族の民俗資料館というのが図書館の隣についていて、それでよく、事あるごとに見学に行かされていたなど。しゃべるんですよ、そのアイヌ民族の博物館の人形が。それがおつかなくて。(連れて行ってくれたのは親か?) もう学校の行事のほうが多いです。小学校、中学校。

(39) 学校の発表会みたいなのが中学校の時にあって、その時にアイヌについて専攻して勉強するグループにいて、それでアイヌの方に会うっていう機会は2~3回あった気がしました。楽器の練習をしたり、踊りを発表会で踊ろうってなって、鶴の踊り。

(40) 知らなかったことを、私は学生の時にそれを知ったので、それを子どもたちに「こういう文化もあるんだよ」というのを知らせるというのは、ずっと続けてほしいなとは思う。…(今後のアイヌの教育は) 資料館の見学だけではなく、もう少し踏み込んで。

(41) 授業では、和人に対して鮭を売る時に、1から10じゃなくて、はじめと終わりがあって、必ず2匹ずつやっていったという。そういうことを和人はやっていたという、商人は。平気で搆取していたという。あとは、百科事典、ジャボニカとかブリタニカとかありますよね。そのある1ページを開いて、アイヌ人はちゃんと百科事典にも出てる。

(42) 小学校だったか、中学校だったか旭川で博物館などに行って、屯田兵、開拓民、開拓の人たちとかアイヌの人たちの展示物を見学しに行ったことは覚えています。  
 (壮年女性)

(43) (学校で郷土の歴史を学んだかという問い合わせ) どうなんだろう。そんなに記憶はないんですけど、多分もしかったとしても、一瞬ふれたぐらいじゃないでしょうかね。そんなに記憶に残っていないので。  
 (壮年女性)

(44) 社会見学というものが小学校とかであって、必ず行くんですよ、アイヌ文化のそういう記念館みたいな所に。郷土博物館とか旭川にあるんですけど、そういう所に多少そういったものを置いてあったので。旭川市の小・中学校に通っていれば、必ずアイヌの文化には、深くではなくても触れることができるというふうに思います。だから、(ひとと) 関わるっていうより歴史の一環として、そういった文様あるじゃないですか。アイヌの文様、そういうものにはふれてきてているんだと思います。  
 (壮年女性)

(45) 小学校の時だったので、お爺ちゃんしかイメージがなかったんですよね。お爺ちゃんが小学校に来てアイヌのことを話したりしていましたね。本当に末裔というか、子孫みたいな感じかな。小学校の時に、ちょっとアイヌの勉強をして、その時に近くにいたから話を聞いたという感じです。

(46) 旭川自体、アイヌがあるので、東側にアイヌの資料館があるので、(娘も) そこに行ったりとか、勉強しているみたいですね。僕も小学校の頃、そこに行って勉強していたので。  
 (壮年男性)

(47) 何かあの辺に、このへん(カムイコタン)がアイヌだよとか学習したような記憶はかすかにあるんです。はっきりアイヌをテーマとしてそこに行ったかどうかはちょっとわからないけど。何かあの辺にアイヌの神様がいたっていうのも、父親からも聞いたことがあるので。ま、何かもしかしたら、そういうアイヌのテーマにした授業でそこに行かされて、何かその辺の地域を見学した、何か遠足兼ねて行ったのか何かそんな記憶はちょっとありますけどね。それぐらいしかないですね。

(48) ムックリをこう何かやった記憶あるんだよね、小さい頃。どこでムックリをやったのか思い出せないんだよね。自分でうまく音が鳴らなかった記憶があるんで。それ、何か多分小学校か中学校の修学旅行で、洞爺とか、登別行った時、あの辺もアイヌいますよね。だから何かその時にね、お土産店か何かで、これ何?って訊いてアイヌの何かの楽器だって言われて、そこで弾いたのかもわからないですね。それぐらいしか関わりはないですね。  
 (壮年男性)

(49) 近文墓地、近文台って言う人もいるんですが、そこにアイヌの墓地があったんですよ。そして、いまもあると思うのですけれど、その畠、墓地の脇に畠があって、そこで、中学校の時に歴史の時間に教えてもらって、探しに行って、石斧、それから矢じり、それを拾った記憶があります。先生に教えてもらってですね。…この辺に川村カ子トさんの資料館というのありますね。こここのところはもう印象に残っていてね。（中学生の頃）話したくとも、行つても相手にしてくれないことがありますよ。和人だつて、話するなつて言うんだつてね。でも、向こうの人たちがみんな逃げていくんですよ。なぜわかるかと言つたら、ここにこうやって、女性の方、必ずこうやって入れ墨していましたよね、結婚したら。入れ墨ね。

(50)（記念館に行ったのは）先生の指導です。歴史で、もしアイヌのことを知りたいのであれば、近文アイヌっていう部落があるから、そこへ行ってみたらどうだという。ということは、石器時代に絡ませて、そして、もし古代を知りたいのであれば、旭川にはこういうところがあるよ、近文アイヌっていう人がいますよ。  
(老年男性)

(51) 小学校の時に、コタンの口笛という本が、教材だったのかな。どうしてそのコタンの口笛というのがあったのか、あんまり覚えがないんだけど。そのコタンの口笛というコタンという言葉が。東京ではアイヌというよりもコタンという言葉の方が、ポピュラーというか。そういうのがあって。

(老年男性)

#### その他

(52) 行者にんにく。あれを、通称でなんかアイヌネギって呼ぶ人もいるし、行者にんにくって呼ぶ人もいるんだけど、でもその日高の子はキトビロって呼ぶんだよねって言って。差別用語になるからキトビロってこっちでは言うんだよねって言って、「そんな呼び方があるのか」って全然知らなかったんですけど、スーパーで季節の食べ物として売ってる中で、キトビロっていうような表現で置いてあるとこもあれば、行者にんにくっていう表現で置いてあるとこもあるのに、ちょっと注目したことはあります。

(53)（阿寒の）ホテルの装飾だとか、そういうのに、すごい意識を持って（アイヌの意匠が）使われてるんだなと思って。  
(壮年女性)

(54) 本当かどうかわかりませんけど。叔父の車でどこか遊びに行く時にカムイコタンを通った時に、私に、あの山、乗っていた私とかいとこに、あのここの上の岩っていうのはアイヌの岩（アイヌの人が神と祀っている岩）で、工事で破壊しようとしたけど、事故が多くて諦めて残っているんだよという話をされたのを覚えています。  
(壮年女性)

(55) 時々層雲峠に行ったりした時にアイヌの方たちの工芸品とか、あと自宅には必ず男女対の木彫りありますよね。あれって必ず、当時どこの家にもあったんです。あと、熊が鮭くわえているやつとか。どこの家にも必ずあって、うちの父なんかも東京の知り合いの方に随分それを買って送つてあげていたんですね。

(壮年女性)

(56) 子どもの時にですね。今、ちょっと新道ができちゃってあれですけど。その頃はカムイコタンという場所がありましてね。ああいう所でお祭りがあって、家族で行った時に、こういう何ていうんでしょう、民芸品の、そういうの（ムックリ）を子どもたちの時、実際やっているのを見たことがあります。子どもにすると何の楽器だろうみたいな。

(57) 北海道の阿寒湖の方に行くと、民族衣装を着て記念写真を撮るとか、そういうのは、何かしら写真はあったように。子どもたちと、あと娘を連れて皆で旅行に行った時とかはそういう写真とか撮ったことはありますね。体験ということに対して躊躇しましたね。自分の意志で体験したいとは思つてもいなかつたと思います。  
(壮年女性)

(58) 名寄市で記念式典あったんですよね。それにも行つきましたけど、松阪市の副市長も来ていましたよ。松浦武四郎の生まれた所。天塩川沿いの近隣の市町村長さんとか、国からも道からも総合政策部長も来て挨拶していましたけど。私も行つて、いろいろ資料もらつきました。天塩日記っていうのをなんか翻訳したやつを、冊子になったのもプレゼントでもらいましたけどね。それに全部アイヌの事も書いていましたね。

(59) お土産品とか、あれですよね。観光地にアイヌの工芸品とかそういうの売っていますよ。だからそういうものは、そういう地域なんだから、そこでアイヌ出身の人がたがそこで講師をするとか、そういう風にやってもいいんじゃないですかね。  
(壮年男性)

(60)（登別に療養行つていた時）熊送りの、あの、イベント、そういうのは実際、登別で見ました。

(61) 町内としての一角にね、平塚賢智さん、彫刻家の。平塚さんはあったね。工房っていうかね。見には行かなかつたけどね。だからうちには、結構アイヌのものもありますよ。玄関にもあるしね。

(62) 旭町にいた時にね、バイトでね、民芸品工場があつて、そしてそこへね、2年ぐらい行つたのかな。

(63) 私、大正琴やつてるんだけど、発表曲で「イヨマンテ」を先生がね、やりますって。それでね、「えつ、イヨマンテ！それじゃ何か作らなくちゃ」ってね、刺繡したの。図書館行つてね、アイヌ文様の本ないですから借りて色々ね、写したんですけどね、布の裏地にね。それを写すつたらもう大変なの、すぐ消えるんで。それでパターンはもう、この形とこれにして、中は少し色々変えてあります。  
(老年女性)

(64) 宝物は、何か、その子の家に行つたら宝刀っていうんですか。刀、何かきれいな、きらびやかな飾り物みたいのはありました。それを大事にしていました。あと、お祈りはしていましたよ。いつも。

(65) カムイコタンの何かやつていますよね。カムイコタンでいつもお祭りみたいなの。お祭りというか、パレードに何回か行つたことがあります。見にます。私たち一般の人にしてみれば、厳かなんだけど、「こういうもんなんだ」という感じですね。

(66)（結婚式場に勤めていた時にアイヌの伝統的な婚礼をあげる人がいたことについて）日本の神社、神主さんを呼んでやる神前式、あれに近いものがあったような気がします。お魚とか、何かそういうものを飾つて、その前で、それこそ三々九度みたいなのをしてような感じが。それを見かけたような気がします。それを何かみんなの前でやるという感じ。周りに人がいて、みた  
いな。

(老年女性)

- (67) 近文地区、アイヌ墓地とか、普通の生活のなかでそういうのを見聞きすることもあるって。朗読とかをやっていまして、その関係で、地元のそういう作品とかを調べるうちに、アイヌとか調べたいなとか知りたいなって思うようになりました。
- (68) 今までってそういう知識があるっていうだけで結構満足していたんですけど、それ知識があるっていう（だけで）知らないっていうことだよなって思い始めて。何かこう自分で体験というか、そういう空気のなかに、やってみたいというか、そういうのはあります。それってやっぱり傍観者ですよね、知っているだけではね。アイヌの文化のなかに入るのは無理だけど、文化のなかでやっていたことをちょっとでも経験する。してみたら、自分がどんな気持ちになるかな、どんなことだろうとか。すごい向き合ふまで大変なんですけど。  
(老年女性)
- (69) (小学生の頃) 熊祭りね。ああいのは見たことがありますよ。(熊祭りの前後の期間) クマを動物の檻に入れて、そして展示している期間があった。  
(老年男性)

表8-18 アイヌ文化を残すべきか

- (1) 割と芸術的に考えちゃうタイプなので、織物については、これは、今だけじゃなくて、これからももっともっと残していくべきというか、私がそういうのが好きなので、なくしたくないなっていうふうには思いました。本当に、染め物をつくる大変さを、生まれて初めて、そのタイミング（中学校での発表会の時）で知ったのですけど、こういうのも当たり前にして、生活のなかに取り入れているというのがすごいなと。いまみんな、手間がかかると嫌じゃないですか。
- (2) 残したいという人が、いまだにも存在…、存在しているからだと思うのですけど、いるなら残すべきだと思うし、無理やり排除するべきではないなと思う。それを残すのに、無理やり残さなければならないなら、義務として残すことに関わる人が生まれるなら、そこまでそういうのを、みんな望むのかな、アイヌの人たちが。自然と継承されていくならまだしも。無理に継承して、誰か次にそれを教える人とか、教えられる人を生まなければならないなら。みんながみんな、したいと思ってできるならいいことだなと思います。
- (3) (旭川市の取組として) 観光の柱として。いいと思います。いいと思うし、できると思う。  
(青年女性)
- (4) 文化があったっていう過去形にはなってしまうんですけども、こういう人たちが、住んでいたとか、そういうことで残すことっていうのは確かに必要なんではないのかなっていう風に思います。その文化が私たちに何か今影響をどのように与えてるかとかそういうところまでわかれば、それを感じることができ施設とか、そういうのがあれば残していくてもいいんではないかなと思うんですけど。ただ、失われたものはそうですよね。今もう、なんか、化石のようになってしまったアイヌ文化を復活すべきなのかなっていうところでいくと、復活、どのような形で一体復活させる気なんですかって…いう気がします。アイヌの方たちが呼んでいた、その呼び方とか、言葉とかをそれこそ辞書のような感じで一つの冊子として残すことは宜しいんじゃないですか。
- (5) テレビとかを見ていたら、なんかやっぱり先住民族が居るところって、オーストラリアだったりとかアラスカの方だったり一杯居ますよね。そういう先住民族の方たちに対しての政策を世界で先進的に取ってるところをどれだけ参考にしたりとか、あと独自の政策として日本が取っていけるのかとか、そういうところで、きっと先進的にやっているところっていうのは、それが必要だっていう理由付けがちゃんとあって、それに沿った政策を取ってるんではないのかなーっていう私のなかのイメージがあるんですよね。だったら、北海道としても日本としても、あってもいいんじゃないですかっていうところなんですよね。  
(壮年女性)
- (6) もともと北海道に先住民として住んでいた方だったので、その方たちの暮らしぶりとか生活の知恵とか、そういうのは残していくべきじゃないかと思うんですけど。でも、松浦武四郎のあれで、いますごくアイヌの方のこと結構話題になっていますよね。そういうのもあって何か和人がアイヌの人たちを弾圧して、いまの北海道ができたみたいな話を聞くので、どうなのかなということ…何か、かわいそうというか、もともといた人たちの文化とかは残していくべきじゃないのかなとは思うんですけど。
- (7) 北海道って、結構、アイヌ語がもとになって地名とかいろいろたくさんあるじゃないですか。それも何かで見たりすると、「ああ、なんだ」って、もともとアイヌの方がいたからということもあると思うので、そういうのも広く広めたらいいのかなと思うんですけどね。  
(壮年女性)
- (8) アイヌっていうか、北海道はやっぱり所謂和人っていう方たちが入ってくる前はアイヌの方が住んでいた場所ですよね。なので、それを除外してっていうのはちょっと違うんじゃないかなっていう。
- (9) 多分血筋的にアイヌだけの血を伝承している方って本当にテレビを見ても少なくなってきたていると思うんですよね。だけど、いまひとつ振り返った時に、自然と共に、自然と共に生きていくっていうことの、その当時はそれをやっていた方たちだと思うので。私たちも今、空気も水も太陽もなければ生きていけないわけですし、食べるものもなければ生きていけないような状態で、素朴な、自然を愛して、自然と共存して、自然と共に生きていくっていうところの見直しというか。それをやってきた人たちの知識とか知恵とか民族性っていうのはやっぱり尊敬に値するものだと思うんですよね。そのなかで生まれた祈りったり、歌ったり、踊りだったりがあるんですね。  
(壮年女性)
- (10) アイヌの人はもともと北海道にいたんですから、歴史から抹消されるのはありえないでしょ。…エイリアンではないですかね。架空のものではないですからね。実際に住んで、営んで、生活をしていた人たちのことなので。今のニーズに準じて現代を生きているアイヌの人がいるっていうのも不思議な話ではないと私は思います。逆に当たり前じゃないのかなと思っています。
- (11) (アイヌ語を残すことについて) それを誰かが声をあげて、高らかに教科書に載せるべきだと、文部省に言えとか、そういうことではないと思います。無理にそういうことをすると、敵も半分、味方も半分ですからね。白と言えば、黒っていう人もいればわかりやすいんですけどね、緑、赤っていう人もいるんですよ。だからそういうことを考えれば、無理に継承していくべきではないと思います。  
(壮年女性)

- (12) アイヌ文化は残した方がいいなと思いますね。自然を敬う心とかね、そういうものはいいこともあるみたいだしね。  
(壮年男性)
- (13) やはり、北海道の先住民族だったので、そういうのは国として守っていかなければいけないのかなという要望というか、漫画（ゴールデンカムイ）を見て、改めてアイヌがこういうんだよというの。
- (14) 普段、そういう、国でも地域でもアイヌのことを、そういうお祭りとか、そういうのもやったほうがいいのかなというのも感想ですね。でないと接することができないし、教えられないし、子どもたちにね。  
(壮年男性)
- (15) 北海道というのは先祖というのが根深いというか、そういうところがあるんで、そういうところを忘れてほしくないという部分がありますよね。
- (16) そういう（優佳良織工芸館のような）ところが活発化すれば、北海道というのが観光にとってもメインになってくるんじゃないかな。昔の子どものころの差別感があったので、そういう差別感というのをなくするというところもあるし、あと、木彫りだと何かの芸術だよね、芸術感をもっとピックアップして観光とか、北海道だと旭川だと、そういうところを知ってほしいなと。
- (17) その文化のほうも、あまりパッとして見ているわけじゃないから。テレビでチラチラと見ているようなものだから、地味という感じだから、もっとその文化を利用した派手なパフォーマンスみたいなのがあったら、そういうものが若い人たちだと、伝統的なものもある程度、継承できている人がいるのであればいいですけどね。  
(壮年男性)
- (18) やっぱり北海道に住んでいるわけだから、ちょっと気にしてもいいかなっていう風には思いますけど。ご本人たちってどう思っているかなって思うんです。文明をもって乗り込んでるのと同じことなので、その文明をもった人たちがわざわざこう残せって言っているような形になっちゃったら、それは本当じゃないのかなって思うし。でも、先人たちですから、先人たちが残していくかなきゃいけないって思っている意志が、でもそれが言えないとするなら、それは汲まなきゃいけないっていう。ちょっと難しいのかなという話ですね。まったく消滅してしまったら、本当の意味で、地名の元になったものとかがなくなつて、由来も何もわからなくなつてしまつて、それはよろしくないと思うんですけども。消えるっていうのはご本人たちがどういう風に思っているかうかがいたいですよね。
- (19) (アイヌを柱にした観光づくりは) 悪くないと思います。なんというか、アイヌの方々がこうメインになって任しとけていいえるようなものができるんであれば、それはそれで。それは、観光でアイヌ文化を観光として任してやってやれるんだったらそれはそれで素晴らしいかなと思います。彼らにしかわからないことです。  
(壮年男性)
- (20) 残す。伝統ですよね。伝統を残さないということになると、次から次へと塗り替わって新しいものになっていくと、まあ、法律の改正じゃないんですけど、古いものを全部焼き尽くすっていうことに、場合によってはなってしまうので。それだと歴史つてなくなっちゃうじゃないですか。  
(壮年男性)
- (21) 本当に地元にいながら知らないなど。多分私だけじゃなくて、知らない人がいっぱいいると思うんですけども、本当に何かどこかの何かの機会に草の根から初めてちょっとでも伝えていかないと本当にくなってしまうなっていうのを。  
(老年女性)
- (22) (アイヌを観光や街づくりの柱にするのは) 私は全然いいと思いますよ。そういうアイヌの伝統的な踊りとか、そういうのを見せるというのもありだと思うんです。でも、全然そういうことはしないじゃないですか、旭川って。カムイコタン祭りだけしかやっていないし、私の知っている限りでは。決してそこらへんでやっているわけではないし。なぜしないのかなと。  
(老年女性)
- (23) 残した方がいいと思います。何故かって言ったら、やっぱり、人間やっぱり歴史でね、つくってきてるんで、何でもなくすっていうのはいい事ではないと思いますので、やっぱり、あった方がいいと思います。
- (24) いいと思うんですけど、そのわれわれがほんとにそのアイヌのことをやっぱり知ってないと交流はできないと思うんですね、結局のところはね。なんも知らないで集まつたって、それはもう、私は非生産的な話で前には進まないと思うから。その前の段階の方が、私は大事だと思いますけど。やるだけつうのはあんまり意味なくて、やっぱりお互いに、その前に、事前に、とにかく和人の方がやっぱりアイヌの文化とかそういうのやっぱり考え方を理解する場っていうのが、むしろそっちの方が大事じゃないかなと私は思うんですけど。
- (25) (アイヌを観光や街づくりの柱にすることについて) それは私個人的には反対ですね。何故かって言うと、見せもんじゃないからさ、アイヌの人がその自分で、なんとか考えてやるんならいいけど、行政が勝手にこんなものをさ、やるっていうのは、オレは、これは御上の思想の何ものでもないと思うんだよね。与えてやる式でしょ。ある面。そんなのさ、絶対よくならないっていうのはもう昔から決まってる。アイヌの人が自発的に自分のもっているその文化をちゃんと理解してもらってるっていうなら、それはいいよ。だけど、市がね、そんなことやるってほんとに、私は公務員の発想から抜けてないなって思うんですよね。  
(老年男性)
- (26) アイヌの人たちは、山だとか海だとか川だとかっていう、必ず神が宿っているという。それで、時期が来たらお祭りするということなのですけれど、これは残したほうがいいなと、私自身。要するに、物事に対して信頼というのですか、信用というのですか、そういうものがね、あまりにも薄れてきてると思うのですよね。大事なことを、この人たちもっているなと思いましたよ。  
(老年男性)

(27) 白老でなくてもね、なんかそういう文化を、ああいう飾って、飾ってというか、イベントとしてやっているけど、素朴な疑問としては、実際どうだったのかなって。ああいう踊りとかね、もちろんいつもやっているわけじゃないと思うけども、なにかの儀式の時とかそういう時にやったものだと思うけど。実際ああいう形のものだったのかなっていうか。今の人がかえって逆に、逆にというか、作ったようなあれもあるんじゃないかなとかね。あまりにもちゃんとしすぎているから。

(28) アイヌのね、そういう先住民族っていうかね、われわれのね、後で入ってきたものだから、やっぱりそこで何とかいい形でね、残してほしいというのはあるけど。（すでに失われてしまった文化）復活というか、実際難しいと思うしね。今いる血混ざった人たちがほとんどだと思うけども、普通の日本人の生活を望んでいるわけであって。かえってそうやって。実際、話を聞いてみないとわかんない。本人たちも望んでいるのか。どの程度望んでいるのか。 (老年男性)

(29) 何でこうやってアイヌ文化と言ってしまって、それと伝統。伝統？まだ続いているじゃないと思う。昨日、官房長官が来て、伝統文化をオリンピックに使いたいとか、お前、そんなの宣伝に使うなよって言いたくなる。しかも北海道に初めて来たっていうぐらいでしょ。官房長官だったら、もうその前に足踏んどけよっていうような感じがあるし。それでもうちょっとアイヌとそれから一応沖縄の民族と、琉球王朝か。向こうは王朝としてある程度の国があったんだよね。それに対する日本の政府といふか、学校でこういうあれを纏めている所とか、結構いろいろなところと北海道に来て接してみて、もっと今から残すどうのこうのじゃなくて、一緒に生活しているじゃない、っていうのが。 (老年男性)

### 注

- 1) 旭川市民とアイヌ文化の関わりを取り上げるにあたり、上山浩次郎による一連の調査報告を参照し、倣ったところもある。
- 2) 北海道の学校教育における取り組みについては、上山（2018）pp.265-6を参照。また、2018年の旭川市役所ヒアリングによれば、旭川市博物館は10年前のリニューアル以降アイヌ文化に比重を置くことになり、アイヌ語講座のような博物館独自の事業の他にも、アイヌ民族音楽会、アイヌ文化ふれあい祭りといった事業に関わってきた。2003年にはじまったアイヌ民族音楽会とは、保存会が小中学校を訪問し、歌謡舞踏、体験プログラムを行なうものである。

### 参考文献

- 小内透編著, 2013.『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- 編著, 2014.『調査と社会理論・研究報告書31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- 編著, 2015a.『調査と社会理論・研究報告書33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- 編著, 2015b,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その4 地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係—札幌市とむかわ町を対象にして—』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 編著, 2016,『調査と社会理論・研究報告書35 先住民族多住地域の社会学研究—札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.
- 編著, 2018,『現代アイヌの生活と地域住民』東信堂.
- 小野寺理佳, 2013,「アイヌの人々との接触・交流と社会関係」小内透編著, 2013.『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 81-112.
- , 2014,「地域住民とアイヌの人々との交流関係—社交と結婚—」小内透編著, 2014,『調査と社会理論・研究報告書31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 85-115.
- , 2015a,「アイヌの人々との多様な交流—クラスメートから結婚まで—」小内透編著, 2015,『調査と社会理論・研究報告書33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 141-69.
- , 2015b,「地域住民とアイヌの人々との交流状況—札幌市とむかわ町—」小内透編著『地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係—札幌市とむかわ町を対象にして—』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 13-50.

- , 2016,「接触・交流と社会関係—各地域の比較検討から見えてくるものー」小内透編著, 2016,『調査と社会理論・研究報告書 35 先住民族多住地域の社会学研究—札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室,137-75.
- , 2018,「和人住民からみたアイヌの人々との交流—「学校」「職場」「日常生活」「結婚」の場面に注目して—」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民』東信堂, 224-48.
- 新藤慶, 2014,「伊達市におけるアイヌ民族・文化の位置づけと評価」小内透編著, 2014,『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 145-64.
- 上山浩次郎, 2013,「アイヌ文化の知識と体験」小内透編著, 2013,『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 113-35.
- , 2015a,「白糠町の和人住民におけるアイヌ文化の知識と体験」小内透編著, 2015,『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 171-96.
- , 2015b,「アイヌ文化の知識と体験—札幌市とむかわ町を対象にして—」小内透編著『地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係—札幌市とむかわ町を対象にして—』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 51-79.
- , 2016,「アイヌ文化の知識と体験」小内透編著, 2016,『調査と社会理論・研究報告書 35 先住民族多住地域の社会学研究—札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 177-212.
- , 2018,「和人住民のアイヌ文化の知識と体験」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民』(先住民族の社会学 第2巻) 東信堂, 49-71.

(小野寺理佳)